

ヒーローの卵として。

高任斎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒロアカの世界に転生した主人公。

受験の際に原作キャラに会えないなど思ったら、そもそも学年が違った。

原作キャラはいなくても、そこには人がいる。

世界を守るなんて言えないけれど、手の届く範囲の誰かを助きたい。

一人の未来は、無限の未来へとつながっている。

一人を救うということは、無数の未来を救うということだから。

主人公が入学、そして体育祭終了後までのおはなしです。

目次

1	1年A組、ぼっち組。	1
2	ある意味英才教育の日々。	24
3	雄英体育祭、開幕。	34
4	第一種目、障害物競走。	49
5	第二種目、缶けり合戦……え？	65
6	第二種目、缶けり合戦……決着。	86
7	昼休憩を挟んで、最終種目へ。	105
8	最終種目、ぶつかり合う想い。	125
9	最終種目、伸ばした手。	146
10	ヒーローになるとき。	178
NEXT	続いていく未来。	203
	おまけの小ネタ集。	208

1：1年A組、ぼっち組。

前世の記憶に目覚めたのは、4歳の頃。

テレビや新聞、そして現実で、個性あふれる社会を目の当たりにした私は、前世の記憶から3つほど、ゲームや漫画の作品を連想した。

そのうちの1つは、この個性が限られた地域ではなく、全世界における現象という時点で除外。

そしてもう1つは、今ひとつ、目の前の現実との合致率が低いので除外。

最後に残ったものが正解かと言われると、『あくまでも自分が記憶している範囲』ではないから、そうとも言い切れない。

しかし、テレビがまたひとつ大きなピースを与えてくれた。

雄英体育祭の、テレビ放送。

種目は違うけれど、1教育機関といえる、高校の体育祭をテレビ放送する。

個性と、ヒーローと、雄英学園。

ああ、やっぱりヒロアカの世界なのか、ここ。

前世ではあまり漫画やアニメに触れることがなくなった年齢に至っていた私だった

が、知人に8巻ぐらゐまで単行本を貸してもらって、一気に読んだ。

なんというか、久しぶりにワクワクしたことを覚えている。

久しぶりに単行本をオトナ買いして、続きを読もうと思ってたんだけどなあ……。

そっか、死んであの世界に転生しちゃったか。

病院で意識不明のまま見ている夢なんて想像は、とりあえずポイだ。

創作世界に転生とか、ぶっ飛んだ考えをすんなり受け入れる時点で、私の心はどこかおかしかったのだろう。

と、いうか。

目の当たりにする社会の物騒さが、否応なしにそれを求めてきたとも言う。

いきなり個性をぶっばなす犯罪者。

免許制とは言え、個性をぶっばなして犯罪者を捕まえるヒーローたち。

前世日本人から見れば、かなりヒヤッハーな世界だ。

千の言葉より一つの暴力。

一般市民だからって、甘えてはいられない世界。

だから、トレーニングというか、鍛錬だ。

ヒーローになるよりも、まずは自分の身を守るために。

私の認識としては、『個性』というのは、あくまでも『個性』でしかない。

つまり、基礎能力……ベースである素の戦闘力を高めて、『個性』なしの戦闘を可能とした上で、『個性』を戦略及び戦術へと組み込む。

その上で分かったことがある。

この身体、強い。

前世でも、スポ根に憧れて小学校の頃からひたすらトレーニングで身体を鍛錬していたからこそ、よくわかる。

前世での憧れというか目標だった『リング破き』を、中学生で達成できたことから、身体のスベックが前世を大きく超えることは明らか。

握力が130キロを超えると、リングがジューズになる前にボコツと砕ける。

いわゆる、これが『リング破き』。

残念ながら、前世では色々と怪我もして、全盛時で90キロ台までしかたどり着けなかったからなあ。

まあ、力が強いってことと、『強い』ってことは別物だ。

特に、この世界は『個性』も重要な世界だから。

どれだけ鍛えても、『個性』でキャラにされるなんてありふれた日常だ。

キャラになるぐらいならいいが、軽く上をいかれることだってあるだろう。

原作のオールマイイトなんかがいい例だろう。

加えて言うなら、この世界の人間は、前世のそれよりみんな身体が強い感じだ。おそらく、『個性』が影響しているのだろう。

10メートルジャンプできる人間は、10メートルの高さから無傷で着地できる。筋肉が、関節が、骨が、それに耐える強度をもっていないと、力を発揮できない。いわゆる、主人公の出久の身体が、個性の力に耐えられないアレだ。

あれが元々、生まれつき彼の個性であつたなら……身体はそれに応じて発達、強化されていたと思う。

この世界の人間は、ほとんどが個性を持って生まれてくる。

そして、その個性に耐えられるように成長していくんだと思う。

この世界の人間が、前世のそれより身体が強いと考える理由はそれだ。

なので、私の身体も……強いレベルにはあるが、飛び抜けて強いってわけじゃない。

この世界にも、『個性が成長にもたらずもの』的な理論の書物は、結構出ている。

身体がそうであるように、『知的な個性』は、頭脳方面の成長に影響を与えるようだ。

つまり、この世界の人は『見た目で個性の方向性を推測できる部分がある』ってことになる。

もちろん、ある程度……だが。

だから私は、慢心することなく、たゆまぬ鍛錬を。

子供たちのあこがれ『ヒーロー』になりたいんだといえ、そんな生活も周囲には理解してもらえた。

もちろん、この鍛錬の限界はある。

その限界がいつやってくるか……良くも悪くも、それは素質ってやつだ。

うん、別に本気でヒーローを目指していたわけじゃない。

もちろん、ヒーローになってみたいと思う気持ちはあったけど……ただ、私になれるのかって疑問が付きまどっていた分、どうしてもね、気後れみたいなものがあつたと思う。

特に、雄英のヒーロー科は、本当に競争率300倍なんて世界だった。

他にも、ヒーロー科のある学校は全国に存在しているが、軒並みすごい人気だ。

個性社会でありながら、個性を自由に使えない社会っていう理由もあるんだろう。

自分の個性を、自分の力を、全力で振るってみたいと考えるのは、おかしいことじゃない。

私のそれも、どちらかといえば、記念受験だった。

せつかく鍛えたんだから、戦いの場に臨んでみたい、自分の力を試してみたい、という理由の半分。

残りの半分は、原作キャラを見てみたいってとこだ。

ミーハーと笑うなかれ。

ドキドキしながら読んだ漫画のキャラが、この世界にいる。

野球少年が、プロの選手に抱くあこがれのようなものだ。

会ってどうこうしたいってわけじゃない。

見てみたい。

漫画では聞けなかった声を聞いてみたい。

峰田くんと、エロい話をしながら、バカをやってみたい。

まあ、そんな感じだ。

そして私は、雄英のヒーロー科を受験した。

実技は分からないが、頭脳の方はギリギリアウトレベルと教師に言われている。

自分ながら、よく頑張ったほうだと思うが……まあ、努力にも限界がある。

時間という名の限界が。

と、いうか……『私』の限界かもしれないけど。

入試会場でキョロキョロしているのは、私だけじゃない。

彼らのそれは、落ち着きのなさだろうが、私のそれは『原作キャラの誰かと会えないかな』ってミーハーな理由だ。

大規模の大学入試ほどではないにしても、競争率300倍、受験者数1万人以上の中から、原作キャラを探すのは難しかったようだ。

まあ、筆記試験は仕方ない。

実技試験だ。

原作キャラの彼らは、実技試験で活躍できるからこそ、あの場にいる。

活躍する人間は、自動的に目立つ。

そして実技試験。

いくつかのブロックに分かれるのは原作通りだったけど、敵の設定が違った。

いわゆる0ポイントの敵が、0ポイントじゃなかった。

1体15ポイント。

ポイントに釣られて近づくと返り討ち……ってことだろうか。

自分の力量と、相手の力量、そのあたりを冷静に判断できるかどうか……あるいは『周囲の人間と協力できるかどうか?』ってところだろう。

あれ？

いや、私……なんで主人公たちと無条件で同学年って考えてたんだろう？

さつき、受験生たちに説明してたのは、プレゼントマイクだ。

だから……。

ああ、だから……原作と、それほど時間のずれはないのかな？

というか、あの敵の15ポイントに釣られてケガ人が続出して、次の年から0ポイントに変更されたとかありそうだよね？

その一方で、原作のレスキューポイントが加わったとか……。

あれ？

この試験では、どう振舞うのが正解なの？

何も考えずにヒヤッハーしてればいいの？

それとも、受験生たちを守りながら戦う？

あ、原作知識を利用できない、ガチの受験だこれ。

凄い人がいた。

イメージとしてはカポエラだ。

脚だけで戦うというか、変幻自在に脚を攻撃に使う格闘技。

元は、両手を拘束された奴隷があみだした格闘技とも言われているあれだ。

そいつは、手も使う。

使うが、威力が低い。

しかし、脚の攻撃の破壊力は桁が違う。

おそらくは個性の力なのだろう。

速度もある、でもそいつはあまり動かない。

その脚力でダッシュすれば速いだろう……でも、方向転換ができない。

トリッキーな動きで相手を先に動かし、華麗にカウンターのキックを放つ。

格好いい。

しばし見とれた。

強い男がいた。

見るからにパワー系。

しかし、主な攻撃は投げだ。

掴み、抱えて、地面に叩きつける。

注目すべきは、その『掴み』を実現させる握力だろう。

ロボットの腕を砕く強さ。

あれも個性の力か。

殴りもする、蹴りもする。

しかし、最後は投げだ。

確かなこだわりを感じさせた。

ああ、私も負けていられないな。

見せよう。

そして魅せよう。

私の個性を。

何かを攻撃してる敵の背後から一撃。

そこにいない誰かの攻撃から逃れようとしている敵の逃げ道に回り込んで一撃。

残念、それは幻覚だ。

私のすぐそばを通り過ぎていく敵の腕。

手応えがないことで体勢を崩した敵に一撃。

私がひたすら鍛錬に努めた理由はわかると思う。

私はこの肉体で戦う。

個性は、あくまでも補助だ。

私の個性は、対象相手を騙す。

あらゆるものを騙す。

人も機械も騙しきる。

フルに使えば、世界だって騙せる。

もちろん、そんなことをすれば反動がある。

「よう、面白い戦い方してんな」

強い男が声をかけてきた。

「その、相手をかく乱する戦い方、わりと好みよ」

凄い人が声をかけてきた。

自分が強いと、凄いと思う相手に何らかの形で認めてもらえたこと、それが嬉しかった。戦いの合間に、危険な状態と判断した受験生を助けたりもした。

感謝する人もいれば、余計なことをするなど怒る人もいた。
まあ、仕方ないとも思う。

ポイントを横取りされたと考えても無理はない。

合格するためにみんな必死だ。

しかし私は、『格好よく』行動する。

いや、『格好よく』行動してしまう。

個性による反動だ。

せつかくだからと、厨二魂全開で名づけた私の個性。

『銀幕の主役ムービースター』

この個性を発動している間は、私主観で、みつともない行動は許されないし、できない。
い。

ああ、受験に合格できるかどうかはわからないけど、実にヒーローっぽい個性じゃないか。
いか。

自分の身を守るってのは、そういう意味もある。

個性発動からの自己犠牲へのコンボが目に見えていたからね。

『私が囷になる』とか、『ここは私に任せて先に行け』とか、絶対にやってしまう。

強くなければ生き残れない。

さあ、15ポイントの敵の登場だ。

ある者は一発逆転を夢見て。

ある者は、ダメ押しのポイント稼ぎのために。

うん、さすがヒーローを目指す人間だ。

あの、でかくて強くて硬そうな敵に、臆することなく向かっていく受験生が多い。

さつきから私は、人助けで忙しい。

やがて周囲から受験生が消えていき、私を含めた3人が残った。

燃える展開だ。

格好いい展開だ。

だから私は逃げられない。

逃げることなんて考えられなくなる。

でかいやつはまず足元から。

そして、その重量そのものがやつの弱点であり、私たちの武器でもある。

私が個性を放つ。

彼女が敵の足元を攻撃する。

男はただチャンスを待っている。

私と彼女が、何度も仕掛け……その時が来た。
ぐらついた敵。

彼女の脚力を利用して、男が飛ぶ、そして掴む。

無意識に、私はつぶやいていた。

「勝ったな」

「……ええ、そのようね」

私と彼女は、男の投げの威力と、自らの重量によって巨大な敵が破壊されるのを見守った。

実技試験が終わり、私は彼女と彼の3人であらためて自己紹介を始めた。

私と違って、ふたりは自信満々だ。

でも、なんとなくだけで……私も、合格する気がしていた。

この受験ブロックに関して言うなら、現時点で私は上位にいるのが実感できたから。そしてなによりも、このふたりが、私を認めてくれたから。

やはりというか当然というか、前世の記憶がある私と違って、二人はまだ中学生。

その能力とは別に、どこか子供っぽさがある。

「じゃあ、これからよろしくな」

「ええ、長い付き合いになりそうね」

私は、差し出されたふたりの手を取った。

原作キャラはいなくても、この2人のような連中がたくさんいて、そんな仲間たちと一緒に、雄英生として、ヒーローの卵としての生活が始まる。

無条件で、そう信じられる……そんな瞬間だった。

合格。

おお。

口元が緩む……それを家族に見られるのが嫌で、こっそりと個性を使う。

口の緩みが戻っていく。

長所と短所は表裏一体。

馬鹿馬鹿しいと思うだろうけど、こういう使い方だつてできなくはない。

私の個性は、『隠蔽』に関して優れている。

家族が喜んでくれる。

父が、母が、姉が、妹が、無条件で喜んでくれる。

同時に心配もしてくれる。

そうだ。

私はもう、ヒーローの卵のような存在だ。

何よりもまず、この家族の笑顔を守らなければいけない。

死ねない。

何はともあれ、私はこの春から、みんなの憧れ、雄英ヒーロー科の学生になる。

さあ、今日は入学式。

ヒーローを目指すと言っても、まだまだ子供だ。

憧れの雄英生になったせいだろう、周囲はみんな浮かれている。

私はまあ、前世の経験がある分だけ、落ち着いてるつもり。

あの2人もいた。

同じクラスか……嬉しいというより、なんとなくホツとする。

「やあ、また会えたね」

「会えるに決まってるだろ」

「私たちが落ちるなら、合格するのは、精々一人か二人よ」

私は苦笑した。

筆記試験のマイナスを、実技試験でカバーしたとは言いがらい。

この自信満々の態度からして、ふたりは筆記試験の方も優秀なんだろう。

私たち3人のようなグループが、教室の中にいくつか出来ている。

受験で知り合ったのか、それとも以前からの知り合いなのか。

明るい、どこか浮かれた雰囲気に含まれている。

ヒーロー志望の人間にとって、雄英のヒーロー科は憧れだ。

仮に、雄英じゃなかったとしても、ヒーローになるための際そのステージにたどり着いた興奮と達成感みたいなものがあるだろう。

合格発表から今日に至るまで、家族はもちろん、周囲からも褒められ続けたんだろうと思う、私と同じように。

先日まで中学生だった子供に、それに抗えというのは難しい。

おお、相澤先生だ。

イレイザーヘッドだ。

そっか、相澤先生がこのクラスの担任……待て。

ヤバイ。

この人、原作キャラの1学年上のクラス全員、退学にしたとか言っただけ？
うざいとか思われるかもしれないが、浮かれてるクラスの仲間にヒーローとしての心
構えと覚悟を促さなければヤバイ事になる！

みんな、時間ときがきた。

ヒーローに憧れていた子供からは卒業しよう。

ヒーローの卵として、自覚と覚悟をその胸に抱き続ける立場になったんだ。

切り替えよう。

歩き出そう。

ここは、スタート地点であり、通過地点だ。

みんなが憧れを抱いたのは、ここの生徒になることか？

ヒーローになることだろう。

ヒーローであり続けることだろう。

手の届く範囲の、誰かの笑顔を守ろう。

もう一度いう。

切り替えよう。

歩き出そう。

ここは、通過すべき場所ではない！

個性？

使ってるよバリバリに。

素面で言えるかこんなこと。

ああ、しかし相澤先生って、マジで入学式とか無視するのね。

家族が見に来てるのは、私の家だけじゃないと思うんだけど。

確かに、ヒーローの自覚を持たせるという意味では納得できなくもないけどなあ。

起立。

礼。

着席。

「……嫌味か？」

嫌味もなにも、私以外のクラスメイト全員退学にしたのは、先生じゃないですか。

「お前、この状況でそんな口をきくのか？」

たとえ退学になっても、私のやることは変わりませんから。

また、受験します。

あの時言った通りです。

ここは通過地点であって、目標ではありません。

ヒーローになります。

ヒーローであり続け、手の届く範囲の誰かの笑顔を守ります。

「……」

相澤先生が、みんなを退学処分にした理由を否定しているわけではありません。

でも、彼らがこの後どうなるか考えたことはありませんか？

「あいつらに、ヒーローの資格はなかった……それだけだ」

私は首を振った。

この人は真面目すぎる。

ヒーローであることに、真摯すぎる。

真面目すぎるヒーローであるがゆえに、教育者としての観点が欠けているような気がする。

教育は、誤りを正し、導くことに本質があると思う。

一度の失敗を認めず、切り捨てるだけなら……そこには、絶望しかない。

たぶん、この人は……ヒーローとしての痛みを、失敗の痛みを、知りすぎている。

だからこそ、この過剰とも思える処罰を下すのではないだろうか。

今の私の行動には、生徒である私の行動には、誰かを動かす力がない。

ましてや、このヒーローの相澤先生にとってはなおさらだろう。

ならば、言葉だ。

今、この人を動かすには、力のある言葉が必要だ。

先生、私が目標とするヒーローが、こんな言葉を残しています。

『一人の未来は、無限の未来へとつながっている。一人を救うということは、無限の誰かを救うことだ』

相澤先生は、教師であると同時に、ヒーローでもあります。

ヒーローとして、あいつらを守ったと言えますか？

仮に、あいつらが絶望から悪の道に走ったらどうなりますか？

退学処分後の、心のケアとか、なにかお考えがありますか？

最低でも、家庭訪問や説明、そして将来について……語るべきだと思います。

あいつらは、ここを退学処分になった。

守る立場を目指す人間から、守られる立場に。

あいつらを守ってください。

ヒーローならば、あいつらを守ってください。

あいつらからつながっている、無限の誰かを救ってください！

いつからか私は泣いていた。

それが格好悪いとは思わない。

言葉は届いただろうか。

先生の心を動かすに足る力を込められただろうか。

ああ、先生がやることとは別に、私もまた、私に出来ることをやるつもりだ。私は、私の手の届く範囲で、だれかの笑顔を守ろう。

先生にそれを求めるだけでは、私は、ヒーローの卵としても失格だろうから。

2：ある意味英才教育の日々。

教師が教室にやってくる。

教室内を見てびくつとし、挙動不審になる。

ああ、うん、私しかないからね。

これだ。

これが1年A組、ぼっち組だ。

B組の連中だろうか、移動しながら中を覗き込むのは。

まあ、それはさておき。

授業だ。

本来、1クラス20人の少数精鋭主義のヒーロー科。

それがA組では、家庭教師状態だ。

座学はいい。

座学はまだいい。

というか、むしろ優遇されてるといってもいいだろう。

問題は実技だ。

1人で体育の授業とか、ぞつとするだろ？
でも、そうなる。

グループに分かれて、の一言が言えない。

2人1組で、の言葉が言えない。

私だ、私こそが1年A組だ！

そんな状態。

まあ、相澤先生とのマンツーマンの格闘実技はものすごい密度の高い時間だった。

休憩もなく、ひたすら実践格闘……やっぱ、半端な強さじゃない。

視線誘導。

思わず攻撃をしてしまう隙をさらすタイミング。

ひとつひとつの動作に、意味がある。

同じ動作でも、速度とタイミングが違う。

動きをつかんだと思った瞬間、すべてをひっくり返される。

相手を幻惑して戦う私にとって、とても参考になる。

あるいは、わざとそういう戦い方を見せてくれているのか。

そうしてのめり込みかけると、『ヒーローの仕事は、敵を殺すことじゃなく捕まえるこ

とだ』と囁きながら、私を捕縛する。

そうか。

そうだ、捕縛術という考えは今まで持ってなかった。

でも、そういう技術を持ってないわけじゃない。

関節技、組み技、投げ技……戦いに混ぜていく。

戦いの幅を広げると、その分思考に負担が増える。

思考に負担が増えると、酸素消費量がはね上がる。

ああ、スタミナには自信があつたはずなのに。

完全に息が上がってしまった私を、わずかに呼吸を乱しただけの相澤先生が見下ろしていた。

ちなみにあの後、校長先生が各家庭を訪問して回つたらしい。

良くも悪くも雄英は有名だ。

特にヒーロー科には全国から生徒が集まってくる。

つまり、寮生活だ。

地元から祝福とともに送り出された子供が、すぐに戻ってくるのか……先日まで中学生だった子供に、耐えられるような仕打ちじゃない。

というか、大人でも泣く。

家庭訪問で何があったのか……それは私にはわからない。ただ、私の携帯に……あのふたりからの連絡はまだない。

退学にならなかつた私から、退学になってしまったあのふたりに何が言えるのか？ そんな風に、多少、気後れする気持ちはある。

それでも、言葉をかけたい。

言葉で足りないなら行動で示したい。

雄英を退学になったからといって、ヒーローへの道が閉ざされたわけじゃない。

そのことを気づかせたい。

行き止まりも、上から見れば抜け道がないこともないと、それを教えたい。

でも何よりも、ヒーローを目指していたであろう、その心をよみがえらせたい。

受験前の、記念受験感覚が嘘のようだが、合格したことで私の意志は強くなった。

仲間の退学処分を受けて、さらに強くなった。

ヒーローを目指す。

いや、ヒーローになる。

手の届く範囲のみんなの笑顔を守る。

今の私の、ヒーローの卵としての手の届く範囲。

あのふたりの存在であり、あの瞬間だけの、クラスメイトのみんなだ。

もし、倒れているのなら、起き上がらせたい。

歩けなくなっているなら、その背中を押しやりたい。

心が折れているのなら、その心に熱を感じさせたい。

勇気とかやる気は、与えられるものじゃなくて、自分の中から湧いてくるものだ。

本当の意味で、私は彼らを助けることができない。

言葉や行動で、彼ら自身が、自分を救うキツカケになるかどうか。

私が考えていたのは、全国放映される体育祭。

勝つことよりも大事なこと。

たき火の熱で旅人が暖をとるように。

暖炉の暖かさに、子供たちが笑みを浮かべるように。

圧倒的な熱量を感じさせる勝ち方というか、戦い方。

暖まってくれ。

自分の中の熱を思い出してくれ。

今はちよつと、心の中のたきが湿っているだけだ。

私は、それを願っている。

言うのは簡単だが、やるのは難しい。

だれかの心を動かす困難さは説明するまでもない。

でも、忘れちゃいけない。

私の個性は、『ムービースター』だ。

劇場型の演出に関しては、これ以上はない個性と言ってもいい。

問題は、私に体育祭を勝ち抜ける力があるかどうか。

授業に、日々の鍛錬に、手を抜けるはずもなかった。

今更だけど。

午前中は、いわゆる普通の高校のような教養の授業。

そして午後からは、実習ならぬ、ヒーロー授業とでも言うのか。

ヒーロー科の生徒に求められることは多く、授業は日曜日以外はびっしり詰まってる。

ああ、うん。

成績がいい人間じゃないと、やるが多すぎていろんな意味でついていけなくなるのか。

は、マンツーマン授業で助かったというべきか。

そしてこれも本当に今更だけど。

「お前、このクラスの委員長な」

……それ、なんか意味あるんですか、相澤先生。

ヒーローコスチュームのお披露目だ。

やはりマントだ。

というか、マント。

私の心の柔らかい部分を、くすぐってくる素敵アイテムだ。体育祭では使えないよとかいう問題じゃない。

マントを身につけてポーズを取る私を、相澤先生が白い目で見ていた。

いや、いつもどおりの表情か。

うん、被害妄想かもな。

見られたくないものを見られた時って、必要以上にあれこれ考えてしまうよね。

そして、全然気にしてないよアピールの為、あらためてポーズをとったり。

童心に返るとはこのことか。

鏡を用意して、マントがどのように翻るかをチェックする。

足の運び。

腰の回転。

ジャンプと着地。

パンチにキック。

何ですか先生、これはヒーローとして特に重要な項目のほうですが。

マントは格好良いだけじゃなく、相手の視線を遮るという目的に使えます。

自分の膝の向きを隠したいとか、攻撃の出処を隠したいとか、そのためにも、自分の動きでマントがどう動くのかのチェックは、当然必要なことです、何か間違っていますか？

「ああ、うん……ソウダネ」

それに、格好良く決めたつもりが、マントの裾が首に絡んだりしたら、（社会的に）死にますよ。

あの、相澤先生。

なぜ、遠い目をして窓の外を眺めてるんですか？

救出訓練……は、原作のあのヒーロー……13号じゃないのか。

そりゃあ、教師だからメンバーも変わるか。

「さあ、ひとりぼっちの君のために、相棒を用意したよ」

そう言って教師が取り出したのは、デク人形だった。

いや、原作の主人公じゃない。

文字通り、木偶人形。

趣味や仕事で漫画を描いてる人なら、デッサン人形の等身大と言ったほうがイメージしやすいかな。

「ちよつと人見知りする彼は無口な少年だ……という設定で」

ああ、はい。

木偶人形を相手に、抱えて走ったり、隙間から引きずり出したり、爆風からその身を守ってあげたり、川の中から助け出したり、息をしない彼に人工呼吸を施したり、肩を組んで、私の個性で作った幻影の夕日を共に眺めたり。

殴り合いはしなかったが、たぶん、友情が芽生え始めたと思う。

なぜか先生が泣いてた。

私の肩に手を置いて、首を振り続ける。

なにか、心の琴線に触れるものでも目撃したのだろうか？

そういうえば、食堂でB組の生徒と、普通科の生徒と、それぞれ話をした。

前者は、単純にぼっち組のことが気になったらしいが、後者は受験の時に私に助けられたらしい。

正直に覚えてないと言ったら、笑った。

『ほかにも助けてたから仕方ない』と言ってくれた。

ヒーロー科には合格できなかったけど、別にその道を諦めたわけじゃない……そう
いった彼の笑顔が眩しかった。

あいつらにも、見て欲しい。

私はそう思う。

私は、そんな日々を過ごしていく。

体育祭までの日々を過ごしていく。

戦略を練っていく。

ゆつくりと、覚悟を決めていく。

そして、体育祭の日がやってきた。

3 : 雄英体育祭、開幕。

体育祭当日。

天候には恵まれた。

こればかりは運任せでしかない。

しかしこの先は、運だけじゃどうしようもない。

私は、その瞬間のために、覚悟を練り上げていく。

一般の観戦客はもちろん、数多くのプロヒーローや報道陣が詰めかける、雄英高校の体育祭。

あらためて、その注目度に感心する。

その広い敷地内には、多くの屋台が立ち並んで……まあ、わかりやすく言えばお祭りだ。

原作知識を持つ私からすると、警備は大丈夫なのかと思いたくもなるが。

ああ、プロヒーローが数多く居る場所で、犯罪行為に走るのは……並の度胸と実力で

はできないか。

でも、入試はもちろん、こういったイベントの際に、内部の確認や生徒たちの能力の確認なんかも進めていたのだろうと思う。

おそらくは、何年もかけて……まあ、今はその事を忘れよう。

雄英体育祭は、完全に学年別で行われる。

1年ステージ、2年ステージ、3年ステージ、という風にブロックで分けられ、観戦客は観戦したいステージへと足を運ぶわけだ。

もちろん、どのステージにも報道陣のカメラが入っていて、テレビ放映において順次切り替えられるのは言うまでもない。

最も注目が高いのは3年生。

しかし、いわゆる通の人が言うには、『1年ステージには、プロとマニアが集まる』そうだ。

ヒーローの卵。

それも、卵になったばかりの、海のものとも山のものとも判断のつかない状態。

その行く末をあれこれ想像し、『あとで語り合う』のが、マニアにとっては一番の楽しみなんだそう。

そしてプロヒーローたちにとっては、入学して間もないこの時期の1年生の実力には

さほど興味はないらしい。

ならば何に注目するのか？

力がないからこそ。

力が足りないからこそ、その元となる心魂が浮き彫りになりやすいのだと。

下手に力をつけてしまうと、そういう根本的な部分を隠すようになってしまう。

そうなる前にこそ、見極める必要が出てくるということらしい。

逆境にこそ、真価が問われるとか……そういう感じだろうか。

一応、タイムスケジュールで多少の考慮はなされているらしい。

各学年の選手宣誓なんかは、ある種の見せ場だ。

同時には行わない。

運良く、私は選手宣誓に選ばれた。

入試でトップだったわけじゃない。

例年、入試トップの人間はA組に編入されてきたらしく、そのせいで毎年A組の人間

が選手宣誓を行ってきた。

まあ、その流れで……A組最後のひとりである、私にその役が回ってきたというわけ

だ。

これは運だ。

紛れもない幸運。

見せよう。

そして魅せよう。

個性を発揮するには絶好の舞台だ。

既にプランは立てている。

必要なのは、覚悟だけだ。

1年ステージの実況を務めるのは、原作でもお馴染みのプレゼントマイクだ。

彼の煽りを受けて、観客席が盛り上がっている。

私は、1年A組として、観客席に囲まれるステージへと続く通路で、出番を待っている。

私の後ろにはB組の生徒たちが、その後ろには別のクラスの生徒たちが、陽光を浴びるステージへと飛び出す順番を待っている。

なんとなくだが、前世の野球場を思い出した。

グラウンドへと続く控え通路。

暗い通路から、明るいグラウンドを見つめ、出番を待っていたことを。

『ヒーロー科!! 一年!!! A組だろおお??!』

出番だ。

私だ。

私が1年A組だ。

胸を張って、無数の視線のもとへと飛び出す。

というか、プレゼントマイク、最後何故疑問形にした？

もちろん、事情を知らぬ観戦客も、ざわめいている。

私以外の、あとに続いてくるべきヒーローの卵が出てこない。

好奇。

疑問。

それらの視線を、私一人で受け止める。

『続いてー！ ヒーロー科!! 一年!!! B組だろおお!!?』

流した。

そのまま流した。

これは強い。

これがプロか。

B組の生徒たちが飛び出してくる。

やや戸惑いを残しつつも、湧き上がる歓声。

大勢による歓声は、物理的な圧力を伴う。

声は空気の振動だ。

肌が震えるようなこの感覚。

懐かしく、そしてどこか誇らしい。

だからこそやらねば。

この場に立てなかった、あいつらのために。

だからこそやり遂げたい。

ヒーローの卵として。

ヒーロー科、サポート科、経営科、そして普通科。

1年の生徒が勢ぞろいする。

各クラスの生徒が集団で固まっているのに対し、A組は私1人。

耳をすませば、『あれ、どういうこと?』とか『A組のほかの生徒は?』などという声

が拾える。

私は下を向かない。

当たり前のように、胸を張って、誇りを携えて、ここに立つ。

注目を浴びるのはむしろ歓迎する。

うわ。

ああ、うん……これも原作と同じ。

ミッドナイトが出てきた。

通称18禁ヒーロー。

心なしか、男子生徒が前かがみになっている。

私も、念の為にこっそり個性を使って耐えている。

女子生徒が男子生徒に向ける視線が怖い。

A組はぼっち組だから、関係ない。

関係ないったら関係ない。

ミッドナイトがムチをふるう。

その動きで、2つの何かが揺れる。

そして多くの男子生徒が頭を垂れていく。

わざとやってるんじゃないだろうか。

「選手代表！1年A組、げんむかなた幻夢空」

……キラキラネームとか言うなよ？

文句は両親に言ってくれ。

まあ、何はともあれ。

私の出番だ。

私の見せ場だ。

そう、魅せ場だ。

敢えて。

それと分かるように個性を発動する。

基本は、ヒーローコスチューム。

マントは必須。

ざわめき。

それは好都合。

というか、そうなるように仕向けた。

マイクの前で、ただじつとそのざわめきが収まるのを待つ。

前世記憶で言うところの、演説テクニク。

何も発しない。

ざわめきが大きくなり……やがて、痛いほどの静寂に包まれる。

すべての注目が、ここに集まった、今。

個性のレベルを上げる。

観客だけじゃなく、テレビの前のみんなに届くまで。

さあ。

振り返って。

みんなに向かつて。

宣誓という名の、演説を始めるとするか。

ヒーロー科の諸君、憧れの雄英高校のヒーロー科に合格したことで満足してないか？
普通科の諸君、子供の頃に夢見たであろう、ヒーローになることを諦めていないか？
サポート科の諸君、自分は裏方だからと、何かを割り切りすぎてはいないか？
経営科の諸君、自分が戦いとは関係ないと勘違いしてはいないか？

犯罪者は、相手を選ばない。

いや、むしろヒーローを選ぶ犯罪者は少ない。

彼らは、ヒーローが守るべき誰かを狙う。

もう一度言う。

お前らの中に、自分は襲われなくても思ってる奴はいないか？

戦うことを諦めている奴はいないか？

戦うつてことは、直接戦って勝つことだけを意味するわけじゃないだろ？

自分の命を守ること。

逃げることも、場合によっては勝ちだ。

ヒーロー科の諸君、自分は強いなどと勘違いしている奴はいないか？

普通科の諸君、サポート科の諸君、経営科の諸君、勘違いをしている存在に、一泡吹かせてやれ。

そしてヒーロー科の諸君は、彼らの工夫を、想いを、受け止めて勝て。

今日の体育祭は、そういう場所だ。

諦めるな。

戦え。

頭を使え。

道具を使え。

仲間と手を組め。

勝つて当然の存在などいない。

負けて当たり前前の存在もない。

ここにいる全てがライバルだ。

私も含めて、ここにいるすべての存在が、人生における通過地点にいる。

ここはゴールじゃない。

ヒーローになる道はひとつじゃない。

ヒーローじゃなくても、戦う道はある。

今いる通過地点から歩き出そう。

前に向かって歩き出そう。

一步向こうに歩き出そう。

諸君たちにはそれができる。

全力で戦え。

全力ではねのけろ。

その全力のお前たちを、この1年A組の私が叩き潰そう。

勝つのは私、1年A組だ。

悔しかったらかかってこい。

感情の、爆発。

怒号。

奇声。

これではただの暴徒だ。

タダの大騒ぎだ。

それに、ベクトルを与える。

雄英生徒としての、ベクトルを。

『プルスウルトラ！』

右手を突き上げる。

『プルスウルトラ！』

左手を突き上げる。

個性によって、集団のあちらこちらに、私の動きと掛け声に同期する幻影が現れる。

無秩序な感情の爆発に、方向性を与える。

『プルスウルトラ！』

『プルスウルトラ！』

『プルスウルトラ！』

観客席を巻き込んだ、大合唱。

さあ、締め言葉。

マイクを掴む。

さあ、雄英高校、体育祭の開幕だ！

『プルスウルトラ！』

『プルスウルトラ!』

『プルスウルトラ!』

プルスウルトラ。

テレビの前の誰かに、届いただろうか。

一歩向こうへ。

でも、その前に、立ち上がらなきゃいけない誰かがいる。

鳴り止まぬコールを背に受けて、私はマントを翻しながらステージから去っていく。

「まだ開会式終わってないんだけど……でも、いい!!」

ミッドナイトが、楽しそうにつぶやく。

「……出番取られた」

解説者席で、プレゼントマイクが地味に落ち込んでいた。

そして。

私は、トイレに引きこもっている。

いや、個性を使い終わったあとの、羞恥心との戦いがまた、ほらね。自分が格好いいと思うことと、それに耐えられるかつてのは別の話。

さつきは、限界手前のレベル4まで使ったから。

覚悟を決めなきや、できないことだ。

トイレの個室で、両手で顔を覆うこと数分。

誰かがトイレにやってきた。

「……なあ、幻夢」

相澤先生だった。

「独裁者でも目指してるの？」

そ、そういうわけでは……ナイデスヨ。

「ところで……お前の個性、単純な幻覚ってわけじゃないな」

……どういう意味でしょう？

「会場で直接それを目にした人間はともかく、テレビカメラを通じてそれが映像化されている。録画もそうだ。つまり、人の精神にうったえる形での、幻覚ではありえない」

まあ、そういうことになりますね。

この個性を使えば、アニメ作品も制作できますからね。

マニア垂涎の個性です。

「今、トイレにこもっているのは個性の反動か？」

……ええ、まあ、そんな感じですよ。

反動ですよ、反動以外の何ものでも、ないです。

「……競技開始時刻に遅れるなよ」

相澤先生の声が、どこか優しく響いた。

4：第一種目、障害物競走。

さあ、出陣だ。

引きこもっていたトイレの個室を後にして、私は第一種目の障害物競走のスタート地点へと向かう。

原作通りでよかったというか、基本的にどの学年も、第一競技はこれになってる。

いや、毎年テレビで放映してるし。

ただし、設置される障害が、色々入れ替わったりはする。

上位42名が、通過だったか？

ヒーロー科が2組で40名だから、おそらくはヒーロー科以外の人間も確実に次に進める枠を確保ってことかな？

でも今年も、ヒーロー科の人間が19人少ない。

つまり、確実にヒーロー科以外の生徒が20人ほど第二種目に登場するってことだ。

原作では騎馬戦だったが、去年は棒倒しだった。

ただ、毎年の傾向として、複数人によるグループを作って競技に挑むスタイルなのは変わらない。

そして私は、ぼっち組だ。

くわえて、さっきの『かかってこい宣言』だ。

まともなやり方では、たとえこの第一種目を勝ち抜いたとしても、第二種目でグループが作れなくて詰む。

少なくとも、B組の生徒が私と組んでくれるということは期待できない。

しかも、私は『個性を知ってる知人』がこの学校にいないというハンデがある。

そして、情報収集もままならない。

本来なら、同じクラスの生徒でいろいろと情報をやり取りするんだろうが、それができない。

なので、出場者の情報を収集しながら、勝つ。

体育祭の前から、色々と戦略を練ってはいたけど、当然ここでフリーズした。

頭を抱えて、ゴロゴロとベッドの上で悶えたりもした。

出来る出来ないの問題じゃなく、やるかやらないか、しかない。

やった上でやり遂げる。

こんなもの、作戦でも何でもない。

スタート直後の傾向は理解している。

毎年同じような光景をテレビで見れば、嫌でも理解できる。

スタートダッシュ組と、後続への妨害組。

そして、障害物というか、敵。

先行勢をつゆ払い役にさせて、悠々と後と追う……作戦が成り立つかどうか。

そのまま逃げ切られる可能性はある。

しかも、前半で仲間候補を確保しつつあとを追う……。

ある種の賭けか。

自惚れではなく、第二種目へと進むのはそれほど難しくないと思ってる。

しかし、私が求めているのはインパクトという熱量だ。

最後方スタートからの、勝利。

もしくはそれに準ずる、インパクトのある戦いぶり。

そつと目を閉じ、その時を待つ。

号砲！

スタートゲートに向かって殺到する生徒たち。

うん、デパートの福袋に殺到する客がこんな感じだったわ。

無駄な体力を使うのはやめて、周囲の人間に気を配る。

転びかけた奴を支え、弾き飛ばされた生徒を受け止める。

さあ、ゆつくりと、行こうか。

『ルールは、コースアウトさえしなきゃ、何をしてもよし!』

『残虐チキンレースの興奮を、各所に設置したカメラロボがお伝えするぜ!』

『さあ、最初に飛び出したのは……』

『……つて、なぜお前がここにいるう!?選手宣誓で勝利宣言したA組のビッグマウスが最後方グループにいるぞお!!』

カメラロボが、私にカメラを向ける。

私にはっこり笑って、言い放った。

ゆつくり走って勝つ。

それが王道さ。

『言葉の意味はよくわからんが、とにかくすごい自信だあ!!』

と、ここで一旦私から注目が外れる。

動くか。

最後方グループの集団に声をかける。

様子を見ているのではなく、単純に身体能力の問題でここにいると思われる集団。

諸君。

ゴール前の障害に地雷ゾーンがある。

この障害に関しては、毎年のことだから知っている人もいるだろう。さて、ここで私からの提案だ。

地面に埋まった地雷を察知できる個性を持っている人はいないか？

この私が責任をもって、そこまで送り届けよう。

顔を見合わせる。

そんな中で、ひとりの少女が手を挙げた。

やや小柄な、三つ編み少女。

顔立ちは穏やか、だが、手を挙げるまでの決断が早い。

「わたし、分かります。田舎のお婆ちゃんに、私の姿を見せたいんです、お願いします」

この場で個性を説明せず、簡潔に。

しかも、心情を付け足す。

間違いない、彼女はキレル。

オツケー。

ではお姫様、こちらへ。

「ひゃっ」

抱え上げて、左肩に座らせた。

一言断りを入れてから、左手を回してその身体を支える。

そして私は、ゆっくりと速度を上げた。

もちろん、個性を使っている。

彼女と、自分自身を対象に、個性を使う。

彼女と、自分を騙す。

私は彼女の重さを感じない。

彼女も、それを疑問に感じない。

レベルを上げすぎないように注意だ。

戻れなくなる。

戻らなくなる。

私の個性は……ヤバイ代物だ。

第一関門は例年通り……仮想敵の登場。

これは、先行するヒーロー科の生徒たちが相手をしていく。

その間に差を詰めていくわけだが……。

さて、お姫様。

「あ、見敵けんてきです。見敵知子けんてきともこです。自分に何かしらの損害というか、ダメージを与える存在

を感じ取ることができない個性です」

……何そのチート。

「経営科を選んだのは、その……運動能力に全く自信がないんですけど、個性を活かせますから」

なるほど。

私は、幻夢だ。幻夢空。空と書いてかなたと読む。

私の個性は、対象を騙す個性だ。

対象は、人でも機械でも、なんでも騙せる。

騙す個性と、騙されない個性。

いいコンビじゃないか。

私がそう言うのと、彼女は、見敵は微笑んだ。

「機械も騙せるということとは……『地雷も騙せる』ってことですよね？」

やはり鋭い。

身体能力は劣っていても、頭のキレでお釣りがくる。

ならば。

君が指示を出してくれ。

私はそれに従って動こう。

「ええ？」

君の個性は、とても有用だ。

次の種目のために、私に指示を出すのに慣れてくれ。

彼女の個性はチートだ。

ある意味、危険を察知できるということだから。

そして恐ろしいことに、私の身体能力を加味した上で、個性を發揮できるようだ。

しかも、自分の個性に絶対の自信を持っている。

個性に自分の全てを委ねる覚悟を持っている。

どこか落とし穴があるんじゃないかと心配になるが、少なくともこの種目において、彼女の個性は輝きを放つだろう。

「右へ、もう少し右。そのまま走り抜けてください」

すまん。

少し寄り道をする。

「ええ？」

あれは、おそらくサポート科の生徒だろう。

この時期に、いくつもの道具を持ち込めるのは、優秀な証拠。

「幻夢さんのしたいようにしてください……でも、また女性なんですね？」
いや。

あれは、男じゃないかな？

私がそう言うのと、彼女は何度も目をこすり始めた。

「ええ？」

……やっぱり男だった。

余計なお世話だったかな？

「いや、助かった。治療してもらえらとしても、怪我をするのは嫌だからね」
そう言つて、彼は私の右肩の上で微笑む。

「あ、あの……男性の方、なんですすよね？なぜ、スカートを？」

「体操服を着用とは言われたけど、その上に何かを身につけてはいけないとは言われなかったからね」

「いえ、そうではなく……男性なのに、どうしてスカートを？」

「可愛い格好が好きだから！」

いい笑顔で言い切った。

これは、見敵の負けだな。

「あ、はい……ソウデスカ。オニアイデスヨ」

私は幻夢。幻夢空で、彼女は見敵。

私はヒーロー科、見敵は経営科の生徒だ、よろしく頼む。

「ああ、こちらこそ。ボクは、もとなり創成。もとなりあゆむ創成歩だよ」

創成は、腰に届きそうなポニーテールをなびかせて、私の右肩の上で立ち上がる。

スカートも翻る。

うん、個性を使つてて助かった気がする。

絶対、その瞬間に視線を奪われてたと思う。

しかし、スラリと伸びた脚には、産毛すらないように見える。

美人だ。

美人は美人、性別とは関係ない、いいね？

さて、第二関門がすぐそこだ。

また少しペースを上げるとしよう。

第二関門は、湿地帯。

いやでも速度が落ちるから。

ただ、空を飛ぶ個性の持ち主には、有利なステージだろう。

そして、彼女、見敵にもそこそこ有利。

安全で、走りやすいルートを、指示してくれる。

あまり速度を上げると、指示が間に合わなくなるようだが……それを差し引いても速い。

腰まで埋まる落とし穴みたいなモノが、そこらじゅうに設置されているのだ。

足でも取られたら大幅なロスというか、下手をするとそこでリタイアになりかねない。

「……便利な個性だね？」

「泥跳ねみたいなのは、女性の敵ですよ？」

何度でも言おう。

なにそのチート。

「あ、同じクラスの子が埋まってる」

彼の手から何かが飛んだ。

そこに落ちた何かがぼんとふくらむ。

浮き輪？

それに掴まって、よじ登っても埋まっていけない？

なんなの、あれ？

「ボクの個性は、身体能力の範囲内なら、正確無比な作業ができることだよ」

ああ、あのコントロールはそういう……。

いや、道具について聞きたかったんだけどね。

もしかすると、私はすごく幸運というか、引きが強いのかも知れない。

『さあ、競争も中盤を過ぎたが、やはり先行するのはヒーロー科の生徒が多いな!!』

『先頭争いも白熱しているが、中団でも熱い戦いが繰り広げられているぜ、もちろん、後方も忘れちゃいけない!!』

『おいおい、A組のビッグマウス君はどこにいった!? って、こんなとこにいた!? しかも、

文字通り両手に華状態だ!!』

『もう一度言うぜ!!なぜ、こんなところにお前がいる!?ワープでもしたのか!!』

『いや、通過地点のタイムを見ると、ほぼ同じペースで走り続けてるな……前のペースが落ちていってことだ』

『なんだそりゃ!?!宣言通り、ゆっくり走って勝とうってのか!?!』

坂道を走る。

危険も何もないここは、私の領分だ。

いや、彼の領分でもあったか。

私の身体能力と、彼の道具で、滑り落ちていく生徒を尻目に通過していく。

そしてようやく、地雷原だ。

感知式か、それとも加圧式か。

爆発はちゃんと加減してあるって、そういう問題か。

しかし、関係ない。

私には、私たちには彼女がついている。

彼女の指示に従って、無人の荒野に行く。

おっと。

私たちのあとを付いてくるような奴には悪戯だ。

そして彼女も、私の意図に気づいた。

私が個性を用いて地雷の上を通過する。

あとを追う連中が見事爆発する。

うん、近くを通れば反応する感知式のようなだ。

そして、地味に彼が道具を使って色々と妨害を働く。

恐ろしい程の正確さで。

「いや、感知式ってことは、遠距離から爆発させるのも可能ってことだよな？」

美人の笑顔はおそろしい。

たぶん、そのひらひらと翻るスカートが、男子生徒を惑わせていると思うぞ。

「だったら、なおさら有効に使わなきゃ、ね」

創成はそうつぶやいて、スカートの裾をつまんでみせた。

何度でも言う。

美人の笑顔は恐ろしい。

うん、私はただ走り抜けるだけでいいような気がしてきた。

トンネルを抜けてスタジアムへと。

さあ、残り30メートルというところか。

ふたりを促して、肩の上に立たせる。

勝者というのは、報道陣へのサービスが義務だからね。

私は大きく両手を広げた。

それを見て、見敵と、創成が、それぞれ肩の上でカメラに向かってアピールする。

ゴール手前のウイニングランとシヤレこもう。

ゴール直前のデッドヒートを期待していた観客には申し訳ないが。

ゆっくりと、私たちはゴールラインを通過した。

結果がアナウンスされていく。

1位：創成歩

2位：見敵知子

3位：幻夢空

……あれ？

ここは、3人が同着って流れじゃないの？

『なお、1〜3位は、写真判定の結果……』

あ、そこまで厳密に……：そーいや、この順位で第二種目のポイント決めるんだもんな。

そりゃ、同着とかない。

大丈夫だよな？

マヌケとか思われてないよな？

レディーファーストって言っとけばごまかせるか。

よし、その線で行こう。

胸を張って堂々としてればなんとかなるもんさ。

5：第二種目、缶けり合戦……え？

え？

第二種目の競技名を聞いた瞬間、かなりの人間が私と同じように反応した。

缶、けり……合戦？

色々と事前に想定はしていた。

想定はしていたが、缶けりじゃなくて、缶けり合戦？

いや、そもそも缶けりという発想そのものがなかった……。

これまで認識していたパターンでは、障害物競走を勝ち上がった40名ほどの人間を、複数の3〜4名程度のグループに分けて争わせていた。

最低でも10個のグループを争わせるのに、缶けりは……いや、去年は棒倒しだったな。

あれも、複数のグループで争わせていたから、近い形に……なるのか？

ちなみに、この世界にも缶けりという遊びは存在する。

前世でも比較的有名だった、ドロケイ、もしくはケイドロなんかもある。

各地で呼び名が違うのはお約束だし、ローカルルールが存在するのもお約束。

ちなみに、前世の私の故郷では存在しない遊びだったけどね……大人になって初めて知ったよ。

そもそも、『集団で遊ぶ』って概念がないぐらい田舎だったからなあ。

と、いかんいかん。

想定外過ぎて、少し意識がトリップしていた。

私は頭を振って、集中を取り戻すべく努力した。

『ルールが発表されてから、その把握と4〜5名のグループを作るために与えられる時間は15分。なお、3名以下のグループは認めません。グループができなければ、その場で失格とします』

その無慈悲な宣言とともに、ミッドナイトは妖しい笑みを浮かべた。

『強いだけじゃどうにもならないってことがあるのを、教えて、あ・げ・る』
なるほど。

原作でも語られていたように、プロヒーローとしてやっていくには、事務所を開き、『人を使う』ことができなければいけない。

自分の欠点を補う人材を確保する交渉力や、自己分析力が問われる種目ってことか。うん、そういうことだよな。

1年A組、ぼっち組に対する悪意なんてない……と思いたい。まあ、その前提で第一種目をああいいう戦い方にしたわけだし。

見敵さん、どうしたの？

「缶けりという時点で、たぶん戦力外です、私」

ふむ？

危険を察知できるって、すごい使えそうだけど？

「わかってても捕まえられない、わかってても逃げられない……自分の経験的に、そんな感じですよ。他人に指示を出すにしても、敵が複数で、一瞬が勝負を分けるとき、私の指示はむしろ足を引っ張ります」

ああ、うん……そうなんだ。

でも、グループに入ってください。

創成も、いいか？

「いいよ。どのみち、君が助けてくれなかったら、ここにはいなかったことだし」と、すると後一人確保すれば、いきなり失格にはならない、と。

『はい、注目。缶けり合戦のルールを公表するわね。もう一度念を押すけど、グループ結成までの制限時間は15分。その5分後に、競技開始の為の陣地選択と準備。時間は

有限、効率的にね』

まず、第一種目の順位に応じたポイントが、各個人に与えられます。

42位を10ポイントとし、10ポイント刻みで1位は420ポイント。

このポイントは、人に半分、『缶』に半分ずつ配分。

つまり、23位200ポイントの生徒は、本人に100ポイント、『缶』に100ポイントが配分されるってことになるわ。

この時点で、周囲がざわめき始めた。

かなりややこしくなりそうなのが、これだけでもわかる。

おそらく、チームとしての『缶』の存在と、捕まえられる『人（捕虜？）』としての存在に、それぞれポイントが分かれるんだろう。

間違いなく、勝敗はポイント制だ。

『はい、静かに。こうやって突然状況が与えられるなんて、ヒーローじゃなくても、現実社会ではよくあることよ……落ち着け』

ミッドナイトが、びしっと、鞭を振るった。

そしてルール説明が続く。

グループは、それぞれ用意されている陣地を選択し、メンバーの誰かの『缶』を所定の位置にセット。

一度置いた『缶』は、ほかのグループに蹴られる（奪われる）まで、変更不可。

なお、陣地内の物体の移動は可、個性による新たな障害物の設置は認めないが、防衛の際に個性を用い、一時的に発生してしまうものは認める。

グループは、それぞれ防衛と攻撃に任意で人員を分ける。

なお、ほかのグループの『缶』を一つも蹴る（奪う）ことができなかったグループは失格なので、全員が防衛の人員になることは認めない。

敵のグループの陣地に侵入して缶を蹴る（奪う）ことができるのは、攻撃の人員のみ。同じく、陣地内に侵入してきた敵の攻撃の人員を捕まえられるのは、防衛の人員のみ。奪った缶、捕まえた敵は、それぞれのポイントが『グループ』で配分される。

なお、防衛の人員は、自分たちの陣地の外に出ることは認めない。
また、攻撃の人員は、自分たちの陣地内に戻ることを認めない。

陣地に侵入してきた攻撃の人員を捕まえる方法は、指差しによる指定後、缶を踏むことで完了。

指差しの指定は、各陣地に配置される審判の判定によるものとする。

なお、指差しさえすれば、何人でも指定することは可能で、その状態で缶を踏めば同時に複数人を捕まえることが出来る。

防御の人員は、誰かを指定するまで、セットした缶から一定距離内には近づけない。一旦指定された人員は、侵入した陣地の外に脱出することで、指定を外すことが出来る。

なお、誰かを指定した防御の人員は、セットした缶から一定距離内においても、ほかの攻撃の人員を指定することができる。

つまり、集団による四方八方からの襲撃に対し、指差し状態のままぐるりと一回転してから缶を踏めば、全員捕まったと審判が判定することもあり得る。

うわあ。

鬼の処理能力を飽和させる作戦は全否定ってことね。

『そういうこと。あくまでもこれは駆け引きの勝負』

一度蹴られた（奪われた）缶は取り戻せないし、奪ったグループが使用することも認めない。

最初に保持していた缶をすべて蹴られた（奪われた）グループは、最後の缶を蹴ったグループの流動捕虜になる。

流動捕虜のいるグループの最後の缶をける（奪う）と、グループの人間だけでなく、流動捕虜も手に入れられる。

なお、さつきも言ったけど、ほかのグループの缶をひとつもける（奪う）ことができなかったグループは失格。

捕らえた捕虜によるポイントはもちろん、持ちポイントも全て無効となる。

無効になったポイントが、元の持ち主に戻されることはない。

『……はい、今から15分。グループが作れなくて失格しましたなんてならないように』
ミッドナイトの宣言とともに、掲示板に残り時間が表示された。

……なんだろう、妙に時間がないことを強調してるな。

それより、ルールを把握して、戦略をねらないと、仲間集めもへったくれもない。というか、なんなの、このえげつないルール。

まず、攻撃に優秀な人間を配置しないと、失格決定。

というか、序盤で缶を奪うことなく攻撃がいなくなると、そのチームは失格決定で、いくら捕虜を捕まえても意味がない。

奪った缶と、捕まえた捕虜は、固定ポイント。

そして、グループを潰したことによる捕虜は、総取り方式。

重要なのは、攻撃の人間は、敵チームの陣地に侵入しない限り、捕まえられないってところだ。

つまり、攻撃の人間は、堂々とほかのチームの攻撃の人間と話し合いができるってことじゃないか。

序盤は壮絶な様子見合戦になって、複数グループが結託して、特定のグループを潰しにかかるって展開かな。

ん？

んんん？

奪った缶と捕まえた敵のポイントは、『グループで』配分？

それって、『グループ全体が勝ち上がる』方式じゃないってことになるな。

じゃあ、グループの人間の間でも、順位の上下が発生するってことで……それはつまり、持ちポイント……。

待て。

そもそも、色々と穴が多くないか？

陣地に侵入って、空中ならどうなる？

個性を使った地中からの侵入は？

そういや、原作では1位は10万ポイントとかやってなかったか？

1位が集中攻撃されないルールなんて……。

まずい！

見敵、創成、誰か一人でいい、グループに勧誘してきてくれ。

冗談抜きで、誰でもいい。

早くしないと詰む。

未確認だが、このルール、上位殺しの罠だ。

「上位殺し？」

「罠って……あ、わかりました、いつてきます」

見敵が、創成の手を引いて歩き出す。

理由は分からずとも、危険を察知したのか。

さて。

ルールについて質問があります、ミッドナイト。

「質問は認めるけど、貴重な時間は失われるわ？それでいいの？」

ええ、構いません。

というか、こつちのほうが重要だと思います。

私がそう言うのと、ミッドナイトが、それはもう、『いい笑顔』を浮かべた。

ああ、そのあたりも計算づくなんだ。

「なら、質問はもつと小さな声で」

と、いうと？

「貴重な時間を消費して得た情報を、無償で他人に渡すことはないわ……今年は一ロー科の人数が少ないから、いつもとは違う、駆け引きという知的バトルの要素を取り入れてみたの」

うわあ、えげつない……そんな場合じゃないな。

失格者多数の時は、どうやって順位を付けますか？

「第一種目の順位上位者から選ぶわ」

缶を奪われた人間の持ちポイントは……。

「もちろん、減るわよ。誰の缶からセットするか、楽しい話し合いになるわねえ、ふふふ」

全滅すれば関係ないですけどね。

あと、陣地の侵入は、空中と地中はどう判定しますか？

「言ったでしょ。各陣地に配置される、審判の判定によるって」

ひでえ。

ガバガバじゃないですか、このルール。

というか、俺の個性の幻覚を指差しても、審判が指定と判断したら、アウトってことですよ？

ミッドナイトがニッコリと笑って、小声で囁いた。

「だって、あなたの個性って、缶をけることもできるわよね？何か問題でも？」

……ないです。

それは私以外の個性にも言えることですし、『審判だけを騙せば良い』ってことですよ？

そう言っつて私が笑うと、ミッドナイトもまた笑う。

たぶん、悪の秘密結社みたいになってる。

とはいえ、これはちよつと、な。

自分だけルールを把握して、勝っても私には意味がない。

その勝ち方では、熱が足りない。

提案します。

今、私に説明した補足を、この場の全員に知らせてください。

「……へえ？」

これが、ヴィランとの戦いならば、いくらでも泥をかぶる覚悟はあります。しかし、今日は体育祭です。

私も、子供の頃からテレビですつと見てきました。

ヒーローに憧れる子供たちに対し、胸を張れる戦い方をしたいと思います。

ヒーローを信じる皆さんに、楽しんでもらえる戦い方をしたいと思います。

私の家族に、友に、そして仲間に対し、誇れる自分でありたいと思います。

「そういう青臭い話はさア……好み!!!」

あ、はい。

「と、いうか……さつきまでのやりとり、全部カメラに収められてるから。良くも悪くも、雄英の生徒は注目されるからね、油断したらダメよ」

……いや、気づいてましたけど？

当然気づいてましたって。

私の個性は、人を騙す個性。

いわばトリックスターですから。

あ、なんですかその生暖かい笑顔は。

ルール補足。

個性も本人のうちに含まれる。

個性による陣地内の新たな障害物の設置は認めない……地中からの陣地侵入は認めない。

同ポイントの場合、第一種目順位によって上下を決める。

審判の判定について、ビデオジャッジを併用。

さて。

残り5分……なんだけど。

「第一種目の1〜3位がそろってるから、集中的に狙われるって敬遠されています」「それと、さつき言ってた上位殺しの罠ってどういう意味だい？」

獲得可能な、総ポイントを計算してみろ。

グループだから無理だが、全部で9030ポイントになる。

最終種目に進出する上位16位に残るためのポイントの最大値は幾らになる？

「……約565ポイント、ですね」

まあ、単純計算するとそうなるな。

俺たち3人は、缶を奪われず、失格にならないため一つ缶を奪えば、全員400ポイント以上確保できて、ほぼ上位16位までに入る。

しかし、残りのメンバーはどうだ？

同じグループなのに、『生き残り』と『そうじゃない』メンツに分裂しやすいんだ、このルール。

様子見から始まるかなと思ったけど、最初っから壮絶なつぶしあいになる。

そして、高ポイントで、固定ポイントになる俺たちの缶は、集中的に狙われる。

「……ああ」

「そういう意味でも、1〜3位が集まってますもんね、ここ」

その上、俺たちのグループが潰れたあとも、潰したグループが狙われる。

でも、そうやって順々に潰されるなんてことにはならず、強者と弱者に分かれる。持ち点なしの失格者が増えたら、第一種目の順位で順位が決まる。

つまり、私たちは……競技に参加させず、ここで失格にさせたほうが都合の良い連中が多い。

「……詰んでる?」

「いえ、こういう時は、必ず余り者が出てくるはずですよ」

ふむ。

少しアピールしてみるか。

個性を使つて。

ただ歩く。

1人が2人。

2人が4人。

同じ動きの4人の『私』が、それぞれ別の行動をとり始める。

1人は踊る。

1人は歌う。

残るふたりは、組手。

パン、と手を打つと、その場に残るは私1人。

さあ、私と戦いたいかな？

私とともに戦いたいかな？

今日はお祭りだ。

戦う前から逃げるなんて野暮な真似はやめてくれよ。

次の種目のために、私をよく知るといふ選択肢もありだと思いが？

「カカカカ！」

奇妙な笑い声を上げながら近づいてきた少年が、ニヤリと笑う。

「よう、それはつまり……俺を勝ち残らせるぐらい、ポイントを稼ぐつもりでいていいの？」

ああ、実はこつそりとパーフェクトゲームを狙っているのさ。

難しいだけにやりがいがあると思ってるね。

「いいね。実は、この手の競技は苦手だな、どうしようかと悩んでた。よろしく頼まあ」

差し出された手を握る。

ゴツゴツとした……見た目は骨ばっているのに、手のひらは柔かい？

私は幻夢だ、幻夢空。

「おう、俺は響、ひびきわたる響航だ……ちなみに、第一種目では40位。移動速度に関しては期待

しないでくれ」

なんでもできる必要はないさ。

いろんな人間がいるから作戦を立てる意味がある。

その上で、出来ることを確実にやる。

それで負けたら、作戦を立てた奴のせいにするればいい。

「カカカ、助かるぜ。同じB組の奴らはよ、この種目じゃ、俺は役に立たないと判断しちゃまってんだ……そんな俺を、活躍させてくれるのかい？」

全力を尽くそう。

じゃあ、ほかの仲間を紹介しようか。

「ほう、俺の個性について確認しないのか？」

ああ、見たからね。

湿地帯で、『声』を使ってルートを探していただろう？

もちろん、ほかの使い道もありそうだが、紹介が先だ。

それから説明してくれば一度ですむ。

さあ、メンバーは揃った。

ようやく作戦が立てられる上に、B組の生徒の情報も得られる。

悪くはない。

陣地は、半径20メートルほどの円。

そんな陣地を10個抱えるフィールドだから、かなり広い。

5人のグループが2つ、4人のグループが8つ、全部で10のグループだ。

ちなみに、グループが組めなくての失格者は出なかった……みんな、コミュニケーションが
いな。

響がいうには、B組の人間はほぼB組だけで集まったようだ……まあ、私のグループ
みたいに、全員ばらばらのほうが珍しいんだろうけど。

おっと、そして陣地の中央に、半径5メートルほどの円があって、その中央に缶をセッ
トする。

つまり、防御の人間は指定^{マーク}してから5メートルの移動を強いられる。

発見および、指定^{マーク}の際にもたもたしている、いいように蹂躪されるだろう。

陣地内には、いくつかのドラム缶や木箱が積まれていて……それを障害物として侵入
ルートを狭くしたりするのもありなんだろうが、私たちは死角を作らないことを重視し
た。

私たちのグループにはただでさえ、危険レーダーの見敵がいる。

むしろ、安心感は余計だろう。

最初に言っておく、あくまでも、『死角がないように見える』スタイルだ。

そして響の個性。

声、というか振動だ。

その影響か、とても耳がいい……敵の話し合いを、こっそり聞けるのはでかい。

正直、B組の人間は、見る目がない。

響の個性を使えば、相手の平衡感覚を狂わせることだってできるだろうに。

耳をふさぐ？

1対1の戦いなら、それも有効かもしれないけどね。

攻撃は私1人。

残りの3人は防御。

言っってはなんだが、この種目……私に向いている。

ああ、最初にセットするのは私の缶でよろしく。

「いいんですか？」

そのぐらいのリスクは負わないとね。

「別のグループと共闘できたら、防御も楽なのに」

というところ？

「わざと、共闘グループの攻撃人員の一人に、陣地内に少しだけ入ってもらうんだよ。そして、それを指定して、缶のそばで待機。ほかの誰かがこのこ入ってきた瞬間、狙い撃ちができるからね。踏む時には、共闘の人員は陣地外に出てもらえばいい」

……その発想はなかった。

すごいな、創成。

「……誰でも考えられると思うよ？」

創成は、参謀に向いていると思う。

見敵の危険察知は言うまでもなく、響の声の個性も曲者だ。

敵の存在を察知するという意味では、トップクラスのグループだろう。

問題は、速度によるゴリ押しでこられた場合。

侵入者を察知。

指定。

缶までの5メートルを移動、踏む。

この間に、侵入者が20メートル移動できる速度を持っていたら、対応できないことになる。

それを告げたら、創成は恐ろしいことを口にした。

そうか、その手があつたか。

うん、やはり美人の笑顔は恐ろしい。

今、私は本気で安心している。

創成を敵に回さなくてよかつたと。

6：第二種目、缶けり合戦……決着。

ふむ。

やはりエリアが広いせいか、原作の騎馬戦と違って、観客も大変そうだ。

全員が集う戦いではなく、あちこちに分散しての戦いになると、何処を見ればいいのか迷うだろうし、解説も大変だろう……解説か、利用できるかな。

さあ、開始だ。

なめてかかるわけじゃないけど、失格回避だけは早めにしようか。

敵陣地のエリア外で、じつと防御の隙をうかがう。

当然、相手もこちらを見る。

個性を仕掛けたと判断されると指定判定マークされかねないから、ここは……。

『早くも缶が宙に舞った!!スピードスターの登場だあ!!』

隙あり。

『ビッグマウスは伊達じゃない!!続いて缶を蹴り上げたのはあの男お!!』

うん、やっぱり解説に意識を持っていかれる選手はいるな。

……そして、次の缶をセツトするまでは手出し（陣地への侵入）無用、と。

なるほど、なるほど、とルールや感覚を確かめるように、私たちのグループの陣地の周囲をうろついていたら、響から聞いていたB組の要注意人物が絡んできた。

さつき、先制のポイントを奪ったのも彼だろう。

「おい、ぼっち野郎。スピードなら絶対に負けねえぞ」

ああ、響から聞いているよ。

50メートル1・5秒なんだって。

さすがにそれは勝負にならないな。

……スピード勝負ならね。

「ほう、面白え……だったら、早々と退場させてやらあ」

忠告しておく。

『私たちの陣地を狙うのはやめたほうが良い』

「……速さこそが最強なんだよ。確かに連発はできない個性だが、安全地帯がある時点で、俺に負けはねえ」

彼は、陣地ギリギリでクラウンチングスタートの構えを取った。

50メートルを1・5秒ってことは、スタートしてから20メートル先の缶を蹴るま

でわずか0.6秒だ。

その時間で、指定^{マーク}して、5メートルの移動、缶を踏むという動作を出来る存在は、限られていようだろう。

まあ、彼と缶を結ぶ直線上に立って、方向転換を強いるぐらいの抵抗は可能だが、もう一度忠告しておく。

『私たちの陣地を狙うのはやめたほうが良い』

私のそれは挑発と思われたのか、唇を歪め、彼の個性が発動した。速い。

単純に時速120キロ……野球のボールみたいなものだ。

創成の脇をすり抜けて缶を蹴り飛ばし……その勢いのまま20メートル以上滑りながらようやく停止して、私に振り返って右手を突き上げる。

うん、だからやめたほうが良いって言ったのに。

得意そうに背を向けている彼を指定^{マーク}し、創成は缶を踏んだ。

「ポコペン」

『イレイザー、あれ反則じゃないのか？』

『攻撃の人員が陣地内に戻ることは認められていない。これは、個性に關しても言える

……が、陣地の外に個性を発動させるのは問題ないな』

さあ、みんなに分かるように脅しをかけておくか。

私たちのグループの陣地が、ひよいひよいと位置をずらすのを見て……選手が騒ぎ出す。

「『『キタネエ!!』』」

そして、創成がにっこり笑う。

「そんなに褒められると、ボク、照れるなあ」

うん、隙あり。

よそ見をしていたグループの缶を、蹴り飛ばした。

さっきのスピードスターの彼には及ばなくても、私の50メートル走は個性の力を借りることなく5秒台を叩き出す。

3秒あれば、確実に缶までたどり着くんだ。

集中すれば3秒は長い。

でも、集中してなければ、3秒なんて一瞬さ……こんなふうだね。

その上、私には個性がある。

今、みんなが見てる『私』は、本当に私かな？

気づいたときにはもう遅い。

本当の私じゃないかも思っても、目を離せない。

相手の心に『もしも』がある限り、騙しは成立するんだ。

『私』が本物だったなら、目を離せばやられるってね。

1対1じゃない、複数による混戦、乱戦の場においてこそ、私の個性は輝きを放つ。
そら。

『私』ではない本体の私が、別のグループの缶を蹴り飛ばす。

蹴り飛ばした瞬間、私は個性を使って新たな『私』を作り出す。

みんなが見ていた『私』を走らせる。

混乱が動揺を呼ぶ。

動揺はさらなる混乱を呼ぶ。

逃さないよ。

さらに別のグループからもう一つ。

陣地から陣地への移動だけはごまかせない。

だからここで一息つこう。

みんなに考える時間を与えよう。

今起こったことを、理解してくれ。

頭の中で考えてくれ。

恐れや、不安は、心に傷を作る。

私の個性は、そんな心の傷に忍び込む。

ヒーローらしくないと思うかな？

でも、人を笑顔にするためにはどうすればいい？

どんな時に人が笑顔を失うかを知るべきだと私は思う。

医者は、人の体の治し方を知っている。

でもそれ以上に、壊し方を知っている……私はそう思う。

ヒーローはなによりも人を知るべきだ。

さてと……これで缶が4個か。

さっきのスピード自慢の彼を捕まえてるから、固定のポイントが5つか。

期待値で言うなら500ポイントぐらいかな。

響を勝ち残らせるためには、グループ4人で分けるから1500ポイントぐらい取れば

ば確実なんだろうけど……？

まあ、さすがにこの先は、そんなに上手くはいかないだろう。

「創成さん、『ポコペン』ってなんですか？」

「え？缶けりの鬼の、掛け声だよ？」

「あ？『ケント』じゃねえの？」

「わ、私の地元では単純に『アウト』でしたけど」

『ちなみに俺は、『ダーン』だったぜ、イレイザーは？』

『無駄口たたいてないで、解説しろ』

『こいつはシヴィー!!』

さて困った。

なぜかというと、ほかのグループの攻撃人員に、囲まれているからだ。

攻撃人員を2名以上出しているグループが結託して、私を封じ込めにかかった。

私の周りに4人。

ご丁寧に手をつないで囲んでくれている。

脅しが効きすぎたかもしれない。

ただ、選手間の妨害は認める（個性含む）が、攻撃（大きな怪我をさせるような行為）は認められていない……というか、反則じゃないのか、これ？

ミッドナイト先生は、いい笑顔で、親指を立てるだけ。

まあ、子供の遊びではこういうことはざらにあつたけどなあ。

どうしよう？

もちろん、自分たちの陣地の防御というか目くらましには何の問題もないのだけだ。

状況が動くまで、少しお休みかな。

しかし、この缶けりのルール……なかなか面白い。

競技が開始されてから出来た駆け引きとしてはこんなものがある。

防御の人員は、指定しない限り、缶には近づけない。

攻撃の人員が陣地内に一步踏み込んだ瞬間、防御側が指定して、缶を踏もうと戻る……その時に、指定された選手が、陣地の外に出してしまうのだ。

これによって、指定は解除、缶を踏もうとしていた防御の人員は『缶から離れるまで指定ができない状態になる』。

うん、単純に見物に回ると、この攻撃側と防御側の駆け引きが面白い。

当然防御側も対応に回って、別の人間がそれに対処する。

すると、防御側に偏りが発生して、隙を窺っていたハイエナが缶を蹴りあげるのだ。

これを発展させると、1人か2人がおとりになって、指定を外した瞬間に、5〜6名が一気に襲いかかるといふ、人海戦術が成り立つ。

もちろん、攻撃側が複数のグループと手を組めれば……だけどね。

この作戦には穴がある。

缶をけるのは一人だけ。

つまり、作戦に参加したグループで、利益が得られるのは1つのグループだけになる。

共闘が容易く成立するとは思えない。

うん、そう思ってたんだが。

さつき、私のグループの、私の缶が蹴り飛ばされた。

私たちのグループを潰すという『利益』が一致したのかもしれない。

いや、個性を発動していなかったわけじゃない。

つまり、毒ガスに対するカナリア作戦をやられた。

誰かが、じりじりと陣地の方向へと近づいていき、ほかの人間が別の方向から同じよ

うに近づく。

私の個性は、陣地内には使えない。

陣地内に侵入すると、私の個性からは解放されるということだ。

私の個性じゃなく、防御の動きを逆手に取られた。

それに気づいた選手がひたすら反復横跳びを開始、創成の動きを確認してから、残り
の人間が全員でバンザイアタックさ。

そのうち2人が、運良く缶のある方向に向かってダッシュしてきた。

1人は、響が個性を使つて転ばせたが……創成も、見敵も、最後の一人に対応できなかったという感じだ。

一応説明しておく、私の個性で『不特定多数の人間に同じ幻を見せる』のはそんなに難しくない。

ただし、『対象者それぞれに別の幻を見せる』のは、ちよつと私の処理速度がおぼつかなくなる。

つまり、私たちの陣地に近づく人間に、それぞれ別の騙し方をしていたぶん、甘くなつたかもしれない。

ここまで広範囲に手を組まれると、さすがに厳しいな。

ああ、創成が『素敵な』笑みを浮かべている。

響も、いい笑顔だ。

うん、見敵がちよっとおろおろしてるのを見ると、和むな。

響の笑顔もそうだが、創成が怖いから、私もこの4人をどうにかしよう。

前後左右、ジャンプやしやがむ動きを繰り返したあと、いきなり動きを止めて腕組みして仁王立ち。

「へへ、逃がさねえぞ」

「頭を使って、仲間と手を組めって、自分で言ったことだよな」

「……許せ」

「……?」

『ついに包囲網から抜け出したその勢いで、缶をゲットだ!! 1年A組、幻夢空!!』

「え?」

「っ!」

「……?」

「はあ?」

「やられた! こいつは幻覚だ!」

疑心暗鬼が人を殺す。

『5人目』の声で、4人の包囲網が崩れた。
もう遅い。

4人の『私』がフィールドを駆けてゆく。

ああ、カメラロボに一言残しておこう。

悪いな、そいつは『幻聴』だ。

『なんか知らんが利用されまくってる気がするぜ！ イレイザー、担任としてどうなんだよ、アレ!?!』

『ルール上、問題はないな』

さあ、特に狙いを決めず、ただ走り回る。

それだけで、混乱が広がる。

混乱は私の武器で、味方だ。

おっと、さつき振り切った1人が、『私』を追いかけている。

いいのか？

周りを見ないと……。

「ポコペン」

陣地のそばを走り抜けながら、『私』は、缶を踏んだ創成に、そして『私の声を拾った』響に対して親指を立てて見せた。

距離の限界があるとは言え、攻撃の人員と防御の人員の間で連絡が取り合えるのは大きい。

さあ、包囲網は崩れたぞ。

私は動きを止めて、フィールド内に言葉を撒き散らす。

残り時間はそんなにないぞ？

手を組んで私たちを潰している間に、失格にならないといいな。

混戦から、乱戦に。

いい感じだ。

こういう状況になるほど、私の個性は生きる。

視界の片隅で缶が飛ぶ。

あれは、『個性』か？

土の塊、もしくは石のようなもので、缶を射撃。

審判の判定は……問題なしか。

いや、むしろなぜ今まで目立った活躍がなかった？
回数制限か？

もしくは、射線が確保できないとダメ、か？

陣地内に侵入すると、普通は正面に防御が位置取るからな。

別の『私』を見ていたグループの缶を蹴り飛ばした。

『ここで脇谷グループがすべての缶を失ったア!! 幻夢グループが、捕虜による大量ポイントゲット!!』

しまった。

あのグループの最後の缶だったのか。

また集中攻撃されかねないか。

『イレイザー!! あれ、反則じゃねえのかよ!?!』

『あれは、個性じゃなく、道具だろ』

解説の声に、ふと予感を覚えてそちらを見た。

いい笑顔をした創成と響が、そこにいた。

そして、ワイヤーかなんかで足首をくくられて宙吊りになっている生贄が2人。

ああ、うん。

ドラム缶とか木箱の位置とか変わってるね。

見敵さんが、すごく遠い目をしているなあ。

どこを見てるんだろう。

混戦から乱戦、その時期は終わりつつあった。

強者による蹂躪の時間。

結局私は、3つのグループにとどめを刺した。

そして私のグループは、一発逆転を狙った連中に集中攻撃を浴び、数人の生贄が新たに宙吊りにされたものの、創成の缶を奪われてしまった。

しかし、グループが潰れていくことで攻撃の人員が減少し、そうした集中攻撃そのものが崩壊したので、生き残ることができた。

グループを潰したことによる捕虜ポイントはそのまま有効になるし、奪った缶と、撃退した捕虜のポイントは当然加算される。

奪った缶が10個。(私と創成が、缶を失っている)

捕まえた捕虜が6人。

グループ潰しの捕虜が10人……これは、攻撃の人員として、グループが潰される前によそのグループに捕まったメンバーがいるからだ。

まあ、最後まで生き残ったグループが私たちを含めて3つだ。

上位16名に入るのは間違いない。

ただ、そうなると……。

こうなる。

『第二種目トップは!! 三つ編みがノスタルジー!! 経営科の見敵知子おお!!』

「まあ、幻夢とボクは、缶を奪われちゃったからね……グループの得点は、公平配分だし」「カカカ、感謝するぜ。ヒーロー科の人間としては、やっぱり決勝種目まで残ってアピールしたいからなあ」

ちなみに、創成が2位で私が3位だ。

響は7位。

私と響のポイント差が、200ポイントほどなので、生き残ったグループはわりと混戦だったのがわかるだろう。

ほら、見敵。

オロオロしてないで、田舎のお婆ちゃんに元気な姿を見せてやりな。

「あ、あ、は、はい!」

見敵さんが、周囲のカメラロボに向かって手を振る。

うーん、癒し枠だなあ。

ただ、さすがに見敵の身体能力で最終種目は辛いだろうな。
なんだかんだ言っても、B組の生徒の勝ち上がりが多い。

順当といえば順当と言えるんだろうけど。

私は、創成を見た。

「なに？ボクの顔に見とれちゃった？」

いや、美人であることは間違いないし、見とれても不思議はないけどね。

今のはそうじゃない。

さっきの種目、創成が敵に回っていたらもつと苦戦しただろうなと思ってさ。

「うーん、幻夢に対抗するには……やはり連合かな。あの封じ込めそのものは悪くない戦略だったと思うけど、最後まで手をとりあえたかという疑問だね」

創成はサポート科だが、戦略に関してはかなり上位の立場の気がする。

相手の持ち味を殺し、自分の優位を有効に使う。

さっきの缶けり合戦だって、やりようによつては、普通科も、サポート科も、経営科も、勝負には持ち込めたと思うんだよなあ。

おそらく、個性を有効活用できなかった生徒もいるんじゃないかな。

そういう意味では『個性を使う訓練をする』ヒーロー科の人間にアドヴァンテージがあるってことなのか。

私も、子供の頃からバレない範囲で個性とか使いまくってたからなあ。

まあ、何はともあれ、最後の舞台に立つ資格を得た。

ふむ、私の個性の欠点はどうでるか……。

最終競技まで時間があるから、また少し考えるか。

「ところでさ、幻夢の……1年A組の応援合戦とか、どうするの?」

……え?

そういえば、あつたなあ、そんなの。

7：昼休憩を挟んで、最終種目へ。

「幻夢、お願い」

任せろ。

チアリーダーの創成が、勢いよく飛び出す。

創成のクラスの綺麗どころが、飛ぶ、跳ねる。

男子連中が、様々な道具を使って盛り上げる。

そして私が、音楽担当だ。

もちろん、個性を使って、ね。

原作では分からなかったが、体育祭の種目は、ある意味ヒーロー科の生徒のためにある。

なら、普通科、サポート科、経営科の生徒たちはどこで盛り上がるか？

もちろん、敗退した生徒たちの参加するレクリエーション競技や、クラス対抗応援合戦などだ。

待って！

ヒーロー科以外の生徒たちのフオークダンスってなんだ!?

聞けば、私たちが戦闘訓練や災害救助訓練をやってる間に、ほかのクラスの生徒達は、合同練習の時間があつたそうだ。

なんか、これを知つたら、血涙流しそうな原作キャラがいるなあ、おい。

というか、体育祭実行委員なんかも存在するし、このために計画を練り、分担を決め、夜遅くまで居残りして体育祭のための飾りつけを準備するなど……学生生活を満喫しているんだなあ、ほんの少しだけ羨ましく思った。

私も含めて、ヒーロー科の生徒は何かを得るかわりに、何かを失っているのだろう。

差別とは言うまい。

ヒーローの卵としての、義務と思おう。

「ありがとう、幻夢。助かったよ」

「ありがとうございます」

「最終種目でも頑張ってくださいね」

創成のクラスのチアに囲まれる。

鼻の下が伸びないように、個性発動。

うん、男は悲しい生き物だ。

「幻夢さあーん」

おっと、見敵か。

今行く。

見敵のクラスは、応援団風で決めるはずだったらしいが……手違いで衣装の数が足り
ないらしい。

任せろ。

そういうことなら、私の個性は超便利だ。

チアの華やかさもいいけど、こういう学ランで揃えた応援団も格好いいよな。

「ありがとうございます、幻夢さん」

「すまん、助かったよ」

「サンキューな、最終種目頑張れよ」

などに見敵のいる経営科のクラスの連中に囲まれていると、背後から声をかけられ

た。

「すまない、幻夢君。ぶしつけな頼みになるが、手を貸してもらえないか？」
そんな流れで、普通科のクラスのマーチングバンドの演出を手伝ったりもした。

うん、知り合いが増えるって楽しいなあ。

さて、1年A組の応援合戦は……少しだけ悩んだ。

『みんな』を出すか出さないか。

ただ、傷をえぐるだけになるかもしれない。

だからこれは、ただの私のエゴだ。

みんなと、1年A組、全員の、応援合戦だ。

応援の演目には、剣舞を選んだ。

6人でラインを3つ作り、2人のリーダーを中心に、剣を片手に踊りながらすれ違っていく。

小さい頃からの個性の練習で、こういうのは得意だ。

言葉を少し交わしただけの仲間がいる。

言葉を交わし、握手を交わしたふたりがいる。

顔だけしか覚えていない仲間がいる。

ああ、やはりこれはエゴだと思う。

私は、どうしようもない自己中だ。

ラスト、みんなが輪になって、高く、剣を掲げる……そう、高くだ。

観客からの拍手を浴びながら、私は半分ほどの後悔と、半分ほどの満足を感じていた。

「……また、個性の「反動か？」」

反動というより、自己嫌悪ですね。

自分のエゴで誰かを傷つけるなら、これはもう、ヒーローの卵以前に、人としてもどうかって話じゃないですか。

トイレの個室。

相澤先生の声が響く。

「連中がみてるとも限らんだろ」

見ますよ。

ヒーローに憧れた人間が。

子供の頃から、ヒーローを夢見ていた人間が。

この体育祭を、見ないなんてことはないです。

……ヒーローを夢見る人間にとって、雄英にはそれだけの重みがありますから。

憧れとか夢って、ヒーローとして甘いですかね？

「甘いな」

ですよね。

「……ヒーローといっても、ただ感謝されるだけとは限らん。恨みや、罵声を浴びせられることもある。犯罪者の身内にとつては、ヒーローはある意味絶望の使者になることもある」

言葉としては理解できません。

「合理的であることを目指すことと、合理的であることは違う……悩むぐらいなら一人でも多く救え。一人でも多くの人を笑顔にしろ。その先に……お前の目指す、ヒーロー

の姿があるかもな」

……ありがとうございます。

「……遅れるなよ」

相澤先生の言葉に対し、私はもう一度繰り返した。

ありがとうございます。

セメントス先生の個性によって、バトルステージが出来上がっていく。

最終種目は、原作と同じく個性ありのガチバトルだ。

上位16名。

ヒーロー科の、A組から、私。

B組から、響を含めて12人。

サポート科から、創成。

経営科から、見敵。

そして普通科から、1人。

前世の記憶の、高校ラグビーの地方予選におけるシード制についてもめたことを思い出した。

同じ高校生なのにシード校なんて不要、みんな平等にやれ……という意見。

それは確かに間違っていないが、現実が見えていない。

週に2、3回の練習しかしないチームの選手と、全国大会優勝を目指すチームの選手が、真正面から物理的にぶつかり合ったらどんな大惨事になるか。

シード制をなくすことは、1回戦でそういう組み合わせが起こりうるってことになる。

野球なら、悲惨なスコアになるかもしれないが、ケガ人が出る可能性は少ない。

同じスポーツでも、接触があるなしで変わってくる。

ガチバトルにおいて、ヒーロー科の生徒と、それ以外の生徒が戦うってことは……そういうことを意味する。

ほんの少しだけ、開会式の選手宣誓を後悔した。

治療担当のリカバリーガールが控えているとはいえ……私の発言は、軽率だったのかもしれない。

大丈夫か、見敵？

「ステージに向かおうとすると、転んじやいます」

彼女の個性は、『危険を察知する』ことだ。

つまり、彼女の本能が……試合そのものを危険と認識してるってわけで。

護身完了か。

「え？」

敵がこう殴りかかってきたらこう受けるとか、こう反撃するとかは、護身術の達人に言わせると、下の下らしい。

本当の護身とは、『危険に近づかない』こと。

危険を察知し、それに近づかない。

見敵は、護身の高みを極めつつあるんじゃないかと。

「か、勝ち残ったということは、負けた人に対して責任を取らなければいけないと思うんです……だから、私は……あの舞台に、立ちます」

プルプルと震えながら、見敵が歩き出す。

ステージに向かって。

なあ、笑うんじゃないぞ。

彼女は今、ヒーローだ。

それを、誰にも否定はさせない。

さて、第2試合はB組の生徒同士の戦いか。

お互いに手の内はわかってる組み合わせなんだろうけど、1人は珍しい個性の持ち主だ。

数本のロープが身体の周りで回転し続ける。

「あいつなあ、『ロープは友達』とか言ってる、日常生活から身体をロープで……」
おけ。

それ以上はいけない。

響の解説をストツプさせた。

ある意味、18禁ヒーローの系譜を継ぐ者かも知れない。

いや、強いんだ。

自分の周囲を守る防御のロープと、蛇のように飛びかかるロープが攻撃。攻守を兼ね備えた……兼ね備えてるよね……。

足首をロープで捕まえられた瞬間、女子生徒が即ギブアップ。

うん、賢明な判断だったと思う。

ただ一言。

女子生徒にとって、いろんな意味で相手が悪かった。

さて、次は私の出番だ。

相手は普通科の生徒なんだが……第二種目で、土の塊というか、石のようなもので缶を狙撃してた彼だ。

回数制限か、射線の問題か。

それとも、『個性を隠しておきたかった』か？

だとすれば、かなりクレバーな性格だ。

威力もあの通りとは限らない。

油断はしない。

低く、構えた。

私は、これといった得意の構えを持たない。

選択肢を広げるために、いろんなことができるように鍛えてきたつもりだ。個性を使う戦いが目立つこの世界、レスリングスタイルはほぼ見かけない。

射撃の的を小さくするという意味と、相手の戸惑い、そして相手の個性の発動条件を探るためなど、いろんな意味がある。

ゆつくりと圧力をかけていくと、相手が、左へ、回り始めた。

まだ、個性を使つてこない。

一步、また一步。

相手の移動範囲を削つていく。

コーナーに追い詰めた。

油断はしない。

コーナーに追い詰められたのは私も同じだ。

相手に対して回り込むことができない。

つまり、まっすぐ向かっていくしかない、この瞬間か！

身体を右に傾けた私の頬を、何かか2つ掠めていった。

構わず踏み込み、左腕を叩きつける。

傾いた相手の身体に、右手を下から突きあげた。

浮いた身体を、そのまま場外へと投げ出す。

「また、渋い勝ち方してんな」

手の内はあまり晒すつもりがないからな、響のように。

「カカカ、違いねえー」

第6試合で、響が登場した。

相手はB組の生徒だが……うん、響が勝つな。

相手の表情に覇気が見えない。

試合開始前から、響が大きく息を吸う。

開始と同時に、相手が耳を塞いで突進して蹴りを放つ。

腕の振りが使えない分、腰が入ってない。

あれでは、響にダメージは与えられないだろう。

淡々と、響は蹴りをさばき、いなし、1分ほど経過したところで、ついにそれが炸裂

「ッ!!!」
した!!!

相手の身体が揺れた。

肩がふらつく。

膝が落ちる。

耳の塞ぎが甘かったか、三半規管にダイレクトだ。

組み合わせの問題かな。

私の対戦相手があの場にいたら、耳を塞ぎながらも遠距離から個性を放って時間を稼げただろう。

そうすれば、状況が変わったかもしれない。

1回戦最後の第8試合。

創成の登場だ。

もちろん相手はB組の生徒。

アドバイスを求められたので、わかる範囲で答えたんだが……。

いい笑顔だった。

番狂わせという創成に失礼か。

観客のほとんどが思っているであろう、『ヒーロー科の生徒が勝つ』という幻想をぶち壊してくれるかも知れない。

バトルステージの上に、直径50センチほどの柱が突き上げる。第二種目では使い勝手が悪そうな個性だったが、これは強烈だ。響が言うには、『車ぐらいなら普通に持ち上げる』らしいからな。しかも、出現した柱が消えない。

器用に逃げ回る創成だが、スペースを、進路を、塞がれていく。うん、下から、下からと。

やはりあれは誘いだな。

『柱は下からしか出現しない』と認識させたところで……だろう。

創成が、道具を使って柱から柱へと逃げ回る。

そろそろだ、気をつけるよ。うまい。

ワイヤーを柱に引つ掛けて、忘れた頃にそれを引つ張る。

倒れた相手に創成が迫ったその時。

柱から真横に突き出た柱が創成をとらえた。

創成の身体が吹っ飛んでいく。

避けられなかったのか……。

いや。

相手の身体が宙吊りになっている。

創成のやつ、吹っ飛ばされた勢いを使って、相手を釣り上げやがった。

ああ、それでもダメーじはあるのか、咳き込んでる。

あああああ、いい笑顔だ。

あいつ、Sなんじゃないのか？

ぐるぐる巻きに……今、相手がギブアップって言いかけてなかったか？

まあ、細かいことはおいておこう。

お見事。

「いやあ、ヒーロー科になんとか一泡吹かせられたよ」

そんな創成に、響も苦笑を浮かべる。

考えてみれば、不思議な集団だよな。

「見敵さんは？」

まだ医務室だと思う。

手を抜くのは失礼かもしれないが、あそこまでやる必要はなかったような気もするけどね。

「……あの監物つて女、美人だが性格がキツくてな」

「そうなの？」

「こう、六法全書で武装するって感じの」

ああ、それはイメージしやすい。

……おい、2回戦で『ロープは友達』のアレと戦うって大丈夫なのか？

「……犬猿の仲と言っていていいな。いや、一方的に女のほうが毛嫌いしてるが、まあ気持ちわかる」

「うわあ」

と、噂をすれば影、か。

うん、間近に見ると一層キツイな。

漫画だとギャグですむけど、リアルでこれは……うん、『変態だ！』とか叫びたくなる。ロープを体中に巻きつけて、『ロープは友達』の彼が創成に向かってロープを差し出した。

「創成さん、君と私は、仲良くなれると思うんだ」

「ごめんさいい」

うん、マジでその気持ちはわかる。

せめて名乗れ。

「おい、縛ばく。前から言ってるが、お前のコミュニケーションはおかしい」

「響君、言葉はあまりにも不自由だよ……拘束の前に言葉は不要なのに、みんなわかってくれない」

……色々と突っ込みたい。

世界平和の道のりは理解しあうことなんて言葉があるが、この方向の理解は世界平和につながるっているのかどうか疑問に思う。

ちなみに、かなりのイケメンなんだけ、こいつ。

普通の服装で街で歩けば、10人中6、7人は振り返りそうな感じの。

まあ、身体にロープを何本も巻きつけたまま歩けば、全員が目を背けるだろうが。

ある意味、『みんなが（別方向に）振り返る』イケメンといえなくもないか。

でも、ヒーローの本質が捕縛にあるとしたら、こいつは優秀なヒーロー候補なのか……？

うごごご、ヒーローの定義が乱れる……。

私が頭を抱えているうちに、創成はどこかに逃げ出したらしい。

うん、ここは響に任せて、見敵さんの様子でも見に行こう。
そうしよう。

医務室。

見敵は治療を終えて、クラスに戻ったそうだ。

しかし、創成がいた。

「肋骨が折れてた」
アブラ

おい。

リカバリーガールを見る。

「アンタはサポート科だ。無理をして試合に挑む意味があるのかい？」

創成が、リカバリーガールではなく、私を見て言った。

「ボクにはないかな。でも、相手や、試合を見る誰かには意味があるかもしれない」
創成が腕を伸ばす。

手を握り、開く……と、そこにコインが生まれた。

コインを親指で弾く。

1枚、2枚、3枚。

落ちてくるコインを受け止めるのではなく、そのまま親指で正確に弾き上げる。

「ボクの個性は、モノを作ることに向いている。そしてモノを作ることが好きだ」

3枚のコインを手のひらで受け止め、握り、開く……コインが消えた。

「それでもさ、ヒーローに憧れなかったわけじゃないし、ヒーローを目指さなかったわけじゃない……その気持ちも、手品みたいにはつと消えたりはしない」

創成の目が、リカバリーガールに向いた。

「ヒーローであり続けることはできなくても、今日1日、この瞬間だけの、ヒーローでありたいと思っはいいませんか？」

誰も言葉を発しない。

やがて、リカバリーガールが大きくため息を吐いた。

「可愛い顔にしても、男の子だねえ……」

「可愛いは正義です。つまり、可愛いはヒーロー」

創成が、柔らかなく微笑んだ。

これもまた、良い笑顔だった。

8：最終種目、ぶつかり合う想い。

『さあ、最終種目の2回戦の始まりだ！ 第1試合は!! B組の監物法!! けんもつりのり 規則は守るためにある!! そのためなら、常に全力全壊のヤバイ女ツ!!』

『対するは！ こいつはヤベエツ!! 18禁ヒーローの系譜を受け継ぐ男が現れた!!』

拘束はコミュニケーションだ!! 縄を自在に操り、高速の拘束を実現する男!! 同じくB組の縛喜知!! ばくよしとも』

うん、どっちもヤバイ。

テレビ放映される解説で、こんな解説をされる時点で、ヤバイのがよくわかる。

縛は、絵ヅラがやばい。

監物さんは、雰囲気はやばい。

なんか、試合が終わったあとに『殺すつもりはなかったのですけど』なんて、返り血を拭いながら言い出しそうな気がする。

1回戦で、プルプル震える見敵さんを情け容赦なく連撃でぶちのめした光景は、観客もドン引きしてたからなあ。

長身で、体型はややスレンダー。

目元がキツめで、温かみを感じさせないところは好みが分かれそうだけど、かなりの美人だ。

そして縛はイケメンだ。

絵になる美男美女のバトルなのに、なぜかモザイクの必要性を感じるところが救いのなさを示している。

「監物さん、しほり分かれあおう」

「汚物は、死消毒ね」

「……どっちも負けてくれないかな」

創成のつぶやきに、周囲の人間の心が一つになった。

戦っている人物はともかく、戦いそのものは見ごたえのあるものだった。縛は、ロープだけじゃなく、自分の身体を使って攻撃することもできる。

遠距離によるロープ攻撃は、その軌道にいくらかの変化をつけられる分、多彩だ。

接近戦になると、ロープの両端が相手に襲いかかる……つまり単純に手数が倍になる。

監物さんは、ある意味単純だ。

分厚い辞書のような塊を両手にセットして、接近戦による嵐のような連撃。

上、下、横から、ひたすら武器で殴打。

速く、強い、そして相手の攻撃をさばききる技術がうまい。

『接近戦に移行してから一分が過ぎた!! 監物の連撃をひたすら受けつつ反撃の機をうかがう縛! ヤバい奴らだが、レベルめっちゃ高えぞ!!』

『……ある意味我慢比べだな。速度が落ちた瞬間、一気に持っていられる』

そして、十数秒後に相澤先生の分析がそのまま現実となる。

「滅べー!」

監物さんが、ロープの間をすり抜けるようにして、縛の顎を殴り上げた。

ロープの動きが止まる……ということは、失神？

しかし、彼女は容赦しない。

ダウンした縛りに馬乗りになって……ミッドナイト先生とセメントス先生が飛び込むまで、それは続いた。

「放せ!! 今! ここまで! トドメを刺す!!」

うん、クール系と思ってたけど、ちよつと違った。

『殺すつもりはなかったのですけど』なんて、言いそうにないね。

ガチで殺しにかかった。

結局、最後はミッドナイトに意識を失わされたけど。

来年のことを言えば鬼が笑うけどさ。

私、この試合を勝ち上がったら、次は、『あの』彼女とやるんだよ？

『な、なかなかヘヴィな第1試合だったな！ 気を取り直して第2試合だ!!』

『ヤツが来た！ ビッグマウスのヤツが来た！ 周囲を翻弄するトリックスターだ、幻夢空あツ!! 一つだけ言える！ こいつはマントが大好きだ!!』

個性を使って、マントを翻してみせた。

マントは格好いい、以上。

『対するは！ B組の良心！ かつ委員長!! 平たいら和かず!! こいつは、ヒーロー科の委員長対決だぜ!!』

さて、試合前の握手を。

「……幻夢のクラスって1人しかいないよな？ 委員長って意味あるの？」

……なあ、B組の委員長って大変だろ？ さっきの試合見るとよく分かるわ。

『何が起こったあツ!! いきなり試合前に2人がうづくまつたぞ！ もう闘いが始まっているのかツ!!』

『……触れてやるなよ』

試合開始と同時に、思怒いを込めた右ストレート。
しかしそれは、彼も同じだったようだ。

『いきなりのダブルノックダウンだ!! 熱い男の拳が交差した!! 燃える展開だろおお!!』

跳ね起きた。

熱くなりすぎた。

身体は熱く、心はクールに、だ。

は、騙し合いで私に勝てると思うな。

誘ってるのが見え見えだ。

彼に向かって個性を飛びかからせる。

彼の拳が、幻影を貫いた……その時、私は既に真横、やや斜め後ろにいる。

私の個性に気づいた人間は、ほとんどが、咄嗟に真後ろを見る。

そして、『意識しない限り、振り返る回転の向きはほぼ一定』だ。

こつちだよ。

振り返る動き。

二度目、間違いない。

彼のみぞおちに膝を叩き込んだ。

なので、前方に向かつて転がるか、走り出すのを私はおすすめる。

うずくまった彼の背中に乗り、片腕と首を極める。

普通ならこれで終わるんだけど……。

この世界はそんなに甘くない。

そして、雄英のヒーロー科の生徒はそんなにやわじやない。

私の顔面を、彼の拳が捉えた。

強くはなかったが、驚きが私に距離を取らせた。

うん、拳だったのはわかる。

でも、背後にいた私の顔にどうやって？

彼が、みぞおちに手を当てて笑った。

「俺の個性は、『ルーズジョイント』だよ。俺の関節に、死角はない！」

彼の足が、曲がる。

膝が、曲がる。

山折りではなく、谷折りに。

正直面食らう。

格闘技つてのは、人間の動きの限界を踏まえたうえの理論で成り立っている。

その理論が、粉碎される動きだ。

おいおい、脱臼とか大丈夫なのか？

「心配してくれて、ありがと、よー！」

パンチが伸びる。

いや、錯覚だ。

肘の関節を利用して、拳が追ってくるだけだ。

ああ、面白い。

この世界は。

個性は面白い。

彼の関節を押さえる。

関節の数が増えるわけじゃない。

関節から先がどう動くか、が問題だ。

慣れてくる。

それが罨の可能性もある、が。

彼の心に毒を垂らそう。

おい、私の個性のこと……忘れてないか？

彼の意識が乱れていく。

集中が拡散していく。

やがて、観客のざわめきが、彼の耳に届く。

バトルステージの片隅で腕組みをして立っている『私』の姿を見た瞬間、彼の表情が歪んだ。

「ま……か」

気合のこもらない彼の拳が、『私』の顔をすり抜ける。

それで彼の意識が、完全に『私』に向いた。

無防備に振り返る。

私に背を向けて。

騙し合いは、私のフィールドさ。

『委員長対決に決着だ!! エグイ! しかしこれがトリックスターだ!! 本物はどれだったんだ!』

『コーナーのは、途中で現れただけだがな……まあ、動き続けければ酸素が足りなくなつて判断力も鈍る。騙しどころをよく理解してるな』

ふむ、いいのを一発もらつたが、次の試合に支障はない、な。

うん、次の試合、か。

あの暴風雨にどう対処したものか。

と、次は響の出番だな。

どうした、浮かない顔だな?

「……ちよつと、相性が悪いんだ、次の相手は」

ああ、手の内がわかる相手つて、大変そうだな。

じゃあ、響の『手』も見られるのか?

そんな顔するなよ。

マジシヤンのようによく手入れされた手のひらだよな。

「カカカ、かなわねえなあ、お前には。まあ、見せることになるだろうが、それでも分が悪い。正直なところ、な」

『続いて第3試合の始まりだ！ 生命は海から生まれた！ 水がなければ生きられない！ 生命を生かす水の個性で敵を絶つ！！ B組の、海原水石うなばらすいし！！ 水も滴るイケメンだあ！！ イケメン多いな、チクシヨウ！！』

『対するは！ 心はイケメン！！ 『音』の個性を用いて、天国から地獄まで好きな場所へとご案内！！ 同じくB組の、響ひびき航わたる！！』

『おい、『心は』ってなんだ？ クレーム来るぞ』

なるほど。

響にとつて、相性が悪そうだ。

まず、2人の速度が違う。

そして、海原の使う……水の個性による防御。

耳の部分に、薄い水の膜が……見えるだけで4枚。

響の『声』というか『音』に関しては、初見殺しの部分があるからな。

本人にもわかっているんだろうけど、近づかせてもらえない。

しかし、あの水。

海原の腰のペットボトル数本の量だけじゃない気がするんだが……まさか、空気中の水分もある程度操作できるとか言わないよな？

仮にそうだとすると、ステージの上の空気はものすごく乾燥して……。喉を痛める。

最悪の相性じゃないか。

ぱん。

響が、手を叩く。

強く。

弱く。

大きく。

小さく。

おいおい、これは……『私の領分』じゃないか？

『音』は『振動』によって伝わっていく。

人の鼓膜は『振動』を拾って『音』を知る。

でも、人の『肌』だって『振動』を『刺激』として感じることはできるんだ。

短調なりズムの『刺激』の繰り返し。

ああ、これに『音』が加わって本領を發揮するのか。

じゃあ、海原には、おそらく届かない。

どうするつもりだ？

響が、息を吸う。

手を叩きながら息を吸う。

海原の牽制的な攻撃をいなしながら、息を吸う。

「ツ
!!!」

自らの叫びに、両手のひらを重ね……。

海原の右耳付近の水の膜が吹っ飛ばされた。

振動の収束か!?

ここで追撃を入れられれば……。

響が、審判に手を振ってギブアップを宣言していた。

ステージから降りてきた響の口から、少量だが血がこぼれた。

「のどを、痛めた……戦えねえ」

私の肩を叩いて、そのまま去っていく。

個性は絶対じゃない。

相性にも左右される。

そう考えると、ヒーローの能力は秘匿したほうがいいように思える。

もちろん、そうした情報の浸透を一蹴する強力なヒーローもまた存在するが。

おなじみのオールマイイトなんかはいい例だ。

前世で言うところの、『物理最強』って感じがするね。

まあ、与えられた材料で、この手に持てるモノだけで、戦うしかない。

それは、誰だってそうだろう。

私だって十分に恵まれているさ。

競争率300倍の難関を突破できる程度に。

ああ、だからこそ雄英の『プルスウルトラ』か。

目指すのは、既存のヒーローじゃない。

いつだって目指すのは明日の自分だ。

『2回戦最後の試合だ！ 盛り上げていくぜ!!』

『涙は心の汗だ！ ならば、己の想いは炎となって燃え上がれ！ B組の燃える闘魂！

熱苦しい想いがすべてを焼き尽くす!! 俺の炎を消せるものなら消してみろ!! 男ヤツ

の名は、炎えんじようかい上灰!!』

『この最終種目2回戦に咲いた一輪の華!! カワイイは正義!! 男だなんて認めねえ

ぞ、チクシヨウ!! サポート科のポニーテールがステージの上で道具とともに舞う!!

創もとなりあゆむ成歩!!』

『マジでクレームくるからやめろ……ヤツは男だ』

プレゼントマイクが、美人の監物さんを『華』と認めてない件。
まあ、華は華でも、血の華って感じはするけど。

試合が始まった。

正直、創成には厳しいな。

基本的にバトルステージの上には障害物が何も無い。

1 回戦において、創成の立体的な動きを可能にしたのは、相手の個性が生み出した柱のおかげだった。

ワイヤーを使う創成の道具が優秀でも、地面に引つ掛けるわけにはいかない。

創成の運動神経は悪くない。

むしろ、一般的に見て良いほうだろう。

ただ、ヒーロー科の生徒の中に入ると、はつきりと劣る。

個性に応じて人は成長するからだろう。

ヒーロー科の生徒の個性は、戦闘向きのモノが多い。

それはつまり、身体もそれに応じて戦闘向きに成長していく。

炎上の攻撃を、その正確無比な動作と『読み』でなんとかいなす創成。

直撃はしなくとも、熱は肌をひりつかせ、呼吸を阻害するだろう。試合を見ているのが少し切ない。

なあ、創成。

腹の痛みは平気か？

体力か。

集中力か。

その両方か。

かろうじての均衡が一気に崩れた。

衝撃で場外へと投げ出された創成のポニーテールが、宙にぱつと開く。

場外へと落ちていく創成の身体を受け止めた私に、ミッドナイトやセメントスからの

お叱りの言葉はない。

勝ち名乗りを受けた炎上から声がかけられた。

「大丈夫か？」

ああ、気を失ってるだけだ。

私が言うのもなんだが、気を使ってくれてありがとう。

「ケガをさせないように気を使ったのは確かだが、手加減したわけじゃない……そう
言っておいてくれ」

炎上は、いい男^{ヤッ}だった……そう言つとくよ。

『2回戦はこれで終了だ！ インターバルをはさんで、準決勝が始まるぜ!! トイレはすませろ！ 飲み物は用意したか!?! もたもたしてる時間はないだろお!!』

プレゼントマイクのアナウンスを聞きながら、私は創成の身体を抱えて医務室へと向かった。

医務室には響がいた。

もう普通に喋ることができるようだ。

喉の粘膜が切れただけ……それは軽いのか？

冬の朝に走つたりすると、喉が切れて血が出るようなもんか。

見敵がきた。

「創成さんは、大丈夫ですか？」

ああ、気を失つてるだけだよ。

ケガそのものは、見敵の方がずっとひどかった。

「……気が付いたら医務室でしたので」

そう言つて頭をかく……が、恐怖心は隠せてない。

そして創成が目を覚ます。

「負けちゃった……かあ」

まあ、屋内ステージとかなら話は別だろう。

あの何もないバトルステージじゃ、創成の強みは活かしにくい。

あと、炎上が心配してたよ、いいやつだな。

「まあ、クラスじゃまともな方だな」

おい、響。

まともな奴が少ないように聞こえるぞ、それ。

「……実際、少ないと思う」

お、おう。

妙な空気になつてしまった。

そんな空気を入れ換えようとしたのか、見敵が質問を発した。

「そ、そういえば幻夢さんのクラスは、なぜお一人なんですか？」

……私以外、全員退学処分になった。

「……」「え?」「……マジだったのか?」

先生の言い分もわかる。

でも、そうじゃないって思う自分もいる。

ただ1つだけはつきりしてるのは……英雄を退学になったからって、ヒーローになれないなんてことはないってことだけだ。

ここは、目的じゃなく手段の場所だ。

そして、ここは通過地点だ。

「幻夢はさ、負けたら格好悪いとか思わないの?」

思わないな。

もちろん、格好悪い負け方もある。

格好悪い勝ち方もある。

格好いいふたりが戦って、負けた方はいきなり格好悪くなるなんてことはないだろ。

それと同じさ。

震えながらも、ステージに向かう見敵は格好よかったよ。

状況を判断して負けを認めた響だって格好良かったさ。

最後まで戦い続けた創成の姿には心が震えたよ。

だったら、次は私の番だ。

正直、彼女相手には分が悪いと思っている。
だからこそ、格好のつけ所だろ、ここは。

9：最終種目、伸ばした手。

『最終種目もいよいよ大詰めだ！ 目を離すんじゃないぞ！ どいつもこいつも、一瞬の油断が命取りになる連中が出揃ったぜ!!』

マントを翻し、ステージへと向かう。

そういえば、バトルステージが壊れてないな。

やっぱり、原作世代は強い……というか、ある意味破壊力に特化したキャラがいたせいかもな。

B組の連中も、まだ使いこなせていない感じを受ける人もいるし、個性もまた鍛えることで強くなるだろうから……悲観するほどじゃない。

ここは通過点だ。

さて、彼女が来た。

暴風雨の化身。

接近戦特化……特化なんだよな？

試合前の握手……は、普通だな。

さっきのアレは、対戦相手がアレだったから？

「さて、幻夢さん」

なんだい、監物さん？

「私はあなたの戦い方が嫌いです」

ふむ。

「あなたの戦い方は、人を騙し、貶め、あざ笑うものとしか思えません。正義とは、常に正しい行いから実現されるべきです。ヒーローもまたそうあるべきです」

なるほど。

監物さんはそう思ってるわけだ。

「事実であって、真理です。私人の思いで左右されるものではありません」

ちらりとミッドナイトを見たが、楽しそうに笑ってた。

時間は気にせずにつけろってことか。

そうか。

監物さんの意見は聞いた。

ならば、私の意見も聞いてもらおうか。

まず。

ヒーローとは格好いいことだ！

「……か、格好いい……ですか？」

そう。

ヒーローとは、誰かを助けられる存在だ。

ヒーローとは、誰かの笑顔を守る事ができる存在だ。

ヒーローとは、泣いている誰かを笑顔にできる存在のことだ。

ヒーローとは、倒れている誰かを立ち上がらせることができる存在だ。

ヒーローとは、歩き出せない誰かの背中を押してあげることができる存在のことだ。

ああ、ヒーローのことを語りだしたら一晩中でも語れるぞ私は。

ギョツとまとめようじゃないか。

誰かを助けられる、笑顔を守れる、泣いている誰かを笑顔にできる、倒れた誰かを立

ち上がらせる、誰かの背中を押してあげられる……そんな存在が格好よくないはずがな

いだらう!?

もちろん、独りよがりの格好良さはノーサンキューだ。

でも、たったひとりでもいい。

誰かがそれを格好良いと認めてくれるなら、そいつはヒーローだ。

大勢の人に認められなければヒーローじゃないか？

そんなことはない。

それが1人だろうが、100万人だろうが、『誰かに認めてもらえる』存在こそがヒー

ローだ。

犯罪者が、車にひかれかけた子供を助けた瞬間をどう思う？

過去のことはどうでもいい。

その瞬間だけは、子供にとつてのヒーローさ。

常に正しい行いから正義がなされる？

たしかにそれはそうだろう。

だったら！

過去に失敗した存在はヒーローにはなれないのか？

一度失敗したら絶望か？

絶望した人間はどうすればいい？

助けよう。

守ろう。

笑顔にしてみせよう。

それが、それこそが、ヒーローだ！

そう思う心がヒーローだ。

その思いを抱えて行動することがヒーローだ。

誰だって、ヒーローになれる可能性を秘めている。

ただ、その可能性の範囲が広いか狭いかなんだ。

ヒーローは特別な存在ではないと私は考える。

大ききの違いはあっても、みんなの心の中にヒーローの卵が眠ってる。

私も、貴女も、心の中から取り出したばかりの、ヒーローの卵なんだ。

失敗しても当然だ。

迷ってもおかしくない。

しやがみこむことだつてあるさ。

でも、そこで起き上がらないと、ダメなんだ。

歩き出さないと、死んでしまうんだ！

ヒーローの卵が！

死ぬんだよ！

……すまない、少し熱くなった。

プルスウルトラは単なる目標じゃないと私は思ってる。

そんな感じかな。

「……あなたの言葉は、戦い方ほどには、不愉快は覚えませんでした」
そうか、ありがとう。

ミッドナイト先生。

ヨダレ垂らしないで、試合開始の合図を。

「あつ、え……もう終わっちゃうの？ すっごい好みの演説だったのに」
まずい。

私の価値観と、ミッドナイトの価値観は似てるかも知れない。

「じゃあ、離れて……始め!!」

いきなりかつ!

飛び込みながらの、叩きつけるような一撃……で、ステージが抉れた。

抉られた破片が飛び散るのを見ながら、私はどこか夢でも見ているような気分だった。

やだ……この人、攻撃力が『原作の強キャラレベル』ってことじゃない。

というか、この人の攻撃って既に『命に関わるような』攻撃じゃないの？

私の鼻先を、彼女の攻撃がかすめていくことで目が覚めた……というか、現実逃避は終了した。

威嚇するように大きく広げられた彼女の右手、左手に、分厚く、重量感たっぷりな塊がセツトされている。

ああ、あらためて対峙すると『六法全書で武装したような女』って言葉の意味を噛み締められるよ。

うん、確かに本っぽい。

私としては、『聖書で物理攻撃してくる聖職者』って表現も捨てがたいかな。

でも、この肌を感じる圧力が……洒落になってないな。

ただのオカルトと馬鹿にしたもんじゃないんだ。

自分より速い敵と戦うとしようか。

敵の速さに注意を向けざるを得ない。

敵の速さをケアしないと、致命傷を受ける……そんな可能性を潰さないといけない。

それはすなわち、こちらの能力と精神力を削られることになるんだ。

圧倒的強者の圧力は、弱者との実力差を広げてしまう。

プレッシャーが、能力を抑圧するんだ。

……仕方ないな。

彼女は私より強い、そこがスタートラインだ。

彼女を相手に、全面的に張り合うには、私の実力が足りない。
何かを捨てよう。

……彼女の、脚による攻撃を切り捨てよう。

……彼女の、遠距離攻撃を切り捨てよう。

……彼女の、投げ、関節技を切り捨てよう。

本来、そこに対応すべきリソースを、別の部分に割り振る。

捨てた部分で攻められたら、諦めるしかない。

私は一撃で沈むだろう。

戦いにおいて、弱いつてことは残酷なことだ。

それでも、切り捨てて、前を向かなきゃいけない。

さて、私の個性を警戒しているのかな？

随分と慎重じゃないか、監物さんは？

私の安い挑発を、彼女は震えがきそうな微笑みで返してきた。

手を広げて、一歩ずつ間合いを縮めてくる。

ああ、すごいな、縛は。

この圧力と、真正面からやりあったのか。

尊敬するよ。

ただの変態なんかじゃない。

すごい変態だ。

彼女が接近戦特化なら、私もまた接近戦主体だ。

私には、中長距離における、これといった攻撃方法がない。

だから、こうなる。

間合いに入る。

彼女の、恐ろしくも美しい連撃が始まった。

右と左が、上、下、横から次々と交互に襲いかかってくる。

この攻撃をロープでさばいてた縛は、本当にすごいと思う。

攻撃を受け流したはずなのに、腕の痛みが身体を硬直させる。

肩で受けると、ピンポン玉のように身体がはじかれる。

まさに竜巻のような連撃。

圧倒的な圧力だ。

個性を使わないのかって？

使えるものなら使いたいね。

今の私は、全身全霊で、彼女の連撃をさばいてるんだ。

ほんの少しでもよそにリソースをわけると、その瞬間沈みかねない。

マントを身につけずに戦う。

そんな姿を、彼女の圧力に強いられているんだ。

ああ、でも。

ジリ貧だな。

このまま彼女の攻撃が永遠に続くんじゃないかという恐怖で、心が押しつぶされそう
だ。

覚悟を決めようか。

しっかりした木の枝と思って手をかけたらいきなり折れてしまつて転びそうになつ
たことはないか？

階段がもう一段あると思つて、バランスを崩したことはないか。

人間の反応、『思い込みによる力加減』はものすごく優秀なシステムだ。

だから、腕一本くれてやる。

ガードされることによる反発を予想していた彼女は、その予想を裏切る抵抗感のなさに、わずかにバランスを崩した。

痛みが全身を駆け抜ける。

歯を食いしばり、呪文を唱える。

プルスウルトラ！

痛みはここに置いていけ！

そして、心と体を一步前に！

わずかに流れた彼女の右手首を無事な右手でつかみ、下方に引き寄せる。と同時に、身体ごとジャンプして、右膝で彼女の顎をはね上げた。

腕一本失った私には、ここで決めるしかない！

着地と同時に、彼女の足を払う。

私の左腕は、痛みだけを送ってくるぼんこつだ。

彼女の右手首を膝で挟んで背中に押し付け、すぐに左腕を狙う。

おいっ!?

転がった体勢のまま、彼女が、左手をステージに叩きつけた。

その反動で彼女の身体が跳ね上がると同時に、鈍い音が私の膝から伝わってくる。

折れるなんて、なまやさしい感じじゃない。

あたりに飛び散るステージの破片を見ながら、私はあらためて彼女の心の強さを尊敬した。

私は腕一本捨てるまでにあんなに時間かけたのに。

監物さんは、一瞬で捨てる覚悟を決めた。

左腕を垂らした私。

右腕を垂らした彼女。

彼女が、にいつと笑う。

「やれば出来るじゃないですか」

どうしよう。

褒められてるけど、怖い。

彼女って強いけどさあ、ヒーローとしてどう活躍するつもりなの？

そんな疑問も、彼女が叩きつけてくる左腕に消え失せた。

2度ぶつかり、離れた。

彼女の連撃が消えた。

片腕ではバランスがとれないのだろう。

試合は一転、私が有利になった。

それでも、彼女の左腕から繰り出される攻撃は脅威だ。

自ら攻めるのではなく、私の動きに合わせてカウンター気味に放り込んでくる。

甘いと言われたらそれまでだけ。

私の意識の隙について、しかも死角から折れた右腕をハンマーみたいに振り回してき

た彼女はどうかしてると思う。

紙一重だったな。

生存本能みたいなものが、私に個性を使わせていた。

私の勝利が、個性に奪われた……そんな気分だ。

「あの場面で人を騙しにかかりますか。これはもう、あなたの性根が腐っているとしか言いようがないですね。聞いていますか、ちゃんと聞きなさい。いいですか、そもそも人を騙すというのは、あなたの言う格好いいことと反する事象ではないかと思うのですが、そのあたりどういう認識を……」

どうしよう。

もしかして私、彼女に懐かれているんじゃないだろうか。だつてさ。

彼女、笑ってるんだ。

ああ、いや、言葉は正確に使おう。

たぶん、笑ってるんだよ。

見てるこつちの背筋が寒くなるような笑顔だけどね。

やったあ！

私は、彼女の笑顔を守ったんだね。(錯乱中)

医務室で、右と左は違えど、仲良く腕を折り合った2人。

ああ、私のは骨折だけど、彼女のは肩の関節がやばい状態。

一家に一人、リカバリーガールつてね。

というわけで、監物さん、早く治療を。

「馬鹿ですかあなたは。性根が腐ってる上に馬鹿なのですね」

彼女がため息をつきながら、負傷した右腕を撫でる。

「怪我というのにはありがたいものです。自分に足りなかつたもの、自分が犯した失敗を、痛みと不自由をもって心に刻み付けてくれるのですから。ああ、なるほど。あなたは学

んでこなかったんですね。怪我が治れば同時にスポーンと忘却の彼方へ。なるほど、あなたが愚かで、性根が腐っている理由がよくわかりました。あなたは学ばなければいけません。いいですか、そもそも……」

いや、それは確かに大事なことももしれないけど。

きちんと治療しないと、その、学校の授業に遅れるかもしれないじゃないか。

「ちっ」

舌打ち!?

「わかりました。愚かで性根の腐ったあなたと違って、私には他人の言葉に耳を傾ける度量があります。体育祭が終わって、休日を過ごし、休み明けの授業を受ける直前に治療を受けることにしましょう。短期間に過ぎますが、それを反省と学習の期間に当てることにします。しかしあなたは違います。あなたには教育と反省と矯正が必要ですが、このあとに決勝を控えています。今すぐ治療を受けて、取るに足らない対戦相手を一蹴しなければなりません。圧勝で瞬殺。それが私に勝った義務と心得なさい」

右腕を撫でながら、監物さんがノーブレスで言い切る。

あの連撃といい、肺活量とかも多いんだろうか。

いや、でも治療って……『ちゅー』ですよね？

「そっとうじやよ」

いや、待ってくださいいりカバリーガール。

あなたの崇高な自己犠牲の精神を否定はしませんが、私にもヒーローの卵として……いや、1人の男としての矜持があります。

治療のために唇を捧げよと、女性の方に要求はできませんよ。

「ほう。あなたは、片腕で決勝に臨むと。ああ、愚かで性根が腐ってるだけでなく、傲慢さも加えますか」

監物さん。

傷ついた右腕を、そんなに撫でるものじゃないよ。

治療はともかく、悪化させるのはよくない。

それに、この左腕は……私が弱かったから負ってしまった怪我だ。

監物さんならわかるはずだ。

私は、あなたより弱い。

いつもいつも、万全の状態で敵と戦えるなんて思う方が間違ってるんじゃないかな？

これは私のエゴだ。

そんなつもりはないが、相手を怒らせるかも知れない。

でもこれはチャンスなんだ。

ヒーローには勝たなきゃいけない時がある。

ヒーローには逃げちゃいけない時がある。

……誰かを守るために、死ななきゃいけない時だってあるだろう。

監物さん。

私はあなたを尊敬する。

腕一本捨てる覚悟をするまでにかけて時間の差が、私とあなたの差だ。

プルスウルトラ。

考えれば考えるほどいい言葉だと思う。

私は、一歩ずつしか成長できない。

一足飛びに成長もできないし、与えられた逆境でいきなり壁を破ることもできない。

ああ、プルスウルトラだ。

私のような、ヒーローの卵のための言葉というのは、考えすぎだろうか。

私は、『覚悟を決める練習が必要』なんだよ。

リカバリーガール。

怪我を誤魔化すための手当をお願いしていいですか。

なあ。

馬鹿なことをやってるって思うだろ？

正直に言う。

私のことについて。

思い出してくれ。

私は、記念感覚で、雄英のヒーロー科を受験したような男だよ。

私の個性は、なんだって騙せる。

世界だって騙せる。

だから当然、私の個性は。

私自身も騙^ましていくんだ。

個性使用時のデメリット。

私主観の『格好いいこと』しかできなくなる。

体験してみないと、わからないかもしれない。

これは、恐ろしいことなんだ。

思考と行動が縛られるってことは。

本当に、恐ろしいことなんだ。

そして、過剰使用時のデメリット。

うん、覚悟していたとは言え、今日は個性を使いすぎたからね。

さっきの私は。

医務室での私は。

個性を使っていなかった。

わかるかな？

個性を使わない状態でも。

私の思考と行動が、縛られるんだ。

そんな私の心と行動は。

本当に、私のものなんだって、言い切れるかい？

個性を使用している時の私は。

デメリットにとらわれている私は。

本当に、私なんだろうか？

『ムービースター』

この名前には。

私の厨二魂と。

皮肉がたっぷり詰まってる。

ハッピーエンドで終わる映画だけじゃない。

悲劇や喜劇だって、あるんだ。

格好いい行動が。

私が格好いいと思う行動が。

誰かを殺すことだってある。

私はそんなことを望んではいなかったのに。

自分自身の望むシナリオを書けない。

そんな私は、『ムービースター』だ。

子供の頃の私は。
もつと。

ずつと。

臆病だった。

この世界に転生してきたこと。

ずつと怖かった。

ずつと怯えてた。

前世の経験は。

前世の知識は。

前世の私は。

この世界じゃ、ほとんど役に立たなかつた。

個性に飛びついた私を。

個性に依存した私を。

笑うかい？

成長とともに、少し心が安定した。

心に余裕ができた。

考える余裕が出来た。

疑念と恐怖の始まりだ。

私は本当に私なのか。

今の私は、成長した私の姿なのか。

心の余裕は、瞬く間に磨り減った。

私はますます個性に依存した。

個性を使っている間は、『楽』だからね。

強くなるための鍛錬は。

現実逃避に近かった。

成長を続ける身体が、怖い。

前世で出来なかつたことをできる自分が怖い。

個性が私を救う。

個性が私を縛る。

思考や行動を、縛っていく。

個性を使えば使うほど。

私が私でなくなっていく。

弱い自分を覚えているのに。

同じような思考や、行動ができない。

感じるんじやなく、思い出すことしかできない。

前世の私はもういない。

子供の頃の私ももういない。

覚えてはいるんだ。

でも、私が殺した。

個性に依存した私が殺した。

私は、個性に頼ることですくさんの私を殺してきた。

私が私であるための拠り所が、消えていったんだ。

私はただ、個性に振り回されているだけの、哀れな存在なんじやないか。

個性という脚本家が書くシナリオを演じるために、『私』が『ムービースター』として
操られているんじやないかって。

こんな事を考える時点で。

私はまともな精神状態じゃなかった。

見ただ目こそたくましく成長したけどね。

私の心は、ぼろぼろだったんだ。

だから。

受験の時、格好いいと思ったあのふたりが私を認めてくれたこと。

それが嬉しかったんだ。

おかしな理屈だと思いかもしれないけど。

自分でもそれはわかってるんだけど。

あのふたりは、あの時の私にとって、ヒーロー救だったんだ。

救いって、そういうものだろ？

他人にとっては無価値な。

でも、自分にとっては、大切な、もの。

相澤先生に対してムキになった理由は、わかるだろ？

大事なものなんだ。

大切なものなんだ。

私にとっての。

立ち上がっていた。

前を向いていた。

歩き出していた。

なんでもできると思った。

なんでもしようと思った。

自分の意思とか、個性とか、どうでもよく思えたんだ。

大切なものを、守るために。

幻滅するかい？

ちっほけなヒーローの卵だって。

あの日から、今この時まで。

私は、歩き続けてきたつもりだ。

変わり続けてきたつもりだ。

それが、『個性』の反動なのかどうか。

どうでもいいと、思えたんだ。

さっきの監物さんとの試合を経て。

何かを吹っ切れそうな気がするんだ。

腕一本犠牲にした自分を、怖いとは思わない。

無茶をしたとは思うけどね。

これも、『個性』の反動なのかどうか。

どうでもいいんだ。

キリがないから。

自分の中に、抛り所を探すのはやめようと思う。

私の心と身体が信じられなくとも。

私はこの道をいく。

歩き始めたこの道をゆく。

この手を伸ばした先にある。

誰かの笑顔。

誰かの命。

これ以上、確かなものはないだろうか？

私の名は。

幻夢げんむ空かなた。

これだけでいい。

自分を見つめるのではなく。

世界を見つめていく。

世界に向かって手を伸ばす。

ヒーローの卵として歩いていく道。

その先にある確かなものを。

守りに行くんだ。

世界に向かって伸ばした手に。

確かなものをつかむんだ。

その時初めて。

私は。

私の個性は。

私をヒーローにするために。

私に与えられた。

そう思えるようになるだろう。

そんな気が、するんだ。

さあ。

出番だ。

『さあお待ちかねだぜ、決勝戦!! 今更選手の紹介は必要か!? たった一人でA組を背負ってここに立つ、幻夢空!! 対するは! B組の仲間を破ってここまで来たぞ、炎上灰!!』

10：ヒーローになるとき。

悪い目覚めじゃなかった。

ただ、軽い倦怠感と……これは、疲労なんだろうな。

昨日、決勝戦が終わったあと、リカバリーガールに唇を強制的に奪われました。

この世界では、この幻夢空の人生としては……ハジメテだったのに。

まあ、大学の新歓コンパで酔っ払った先輩に、無理やり初めてを奪われるよりはましだろう。

なんせ、今回の相手は女性だ。

しかも、時間さえ巻き戻せば、目も覚めるような美人なんだ……だったよね？

うん、ポジティブに行こうぜ。

起き上がり、身体感覚を確かめるように軽く動かす。
疲れてる。

疲れてるのになあ。

誰かと戦いたい。

そんな気持ちがある。

ヒーローの卵が、まず戦うことを考えてどうする、と苦笑しなくなつた。少し早いが、走りにいこうか。

ゆつくりと、身体を起こす。

心臓が目覚めます。

血が全身を巡りだす。

自然と笑みが溢れる。

ペースを上げた。

ああ、成長した自分がわかる。

心の向くまま、知らない道をゆく。

帰り道？

気にするな、今日は休日さ。

1時間ほど走って、目に付いた公園へ。

調子に乗りすぎた。

まあ、帰りのことは軽く体操しながら考えよう。

視線を感じる。

それも複数の視線。

自然に、背筋が伸びる。

ただのヒーローの卵でしかない私だけれど、世間一般の『雄英生』の認知度は高い。ましてや昨日は、体育祭のテレビ放映があった。

一時的なものだろうけど、今の私は、顔が割れている。

この道をいくならば、いつも見られる覚悟が必要だ。

見るものを勇気づける背中を。

見るものに笑顔を与える微笑みを。

今の私は虚像でしかない。

少しずつ。

一歩ずつ。

前へと進んでいこう。

私は公園を後にした。

ある程度の方角だけを定めて、走り出す。

目覚めた時に感じていた倦怠感も、今はもうない。

少し遅くなった朝食をとり、自分の部屋のベッドに寝転んだ。

朝食のカロリーが、熱を全身へと運んでいる気がする。神経が高ぶっているのか。

目をつぶる。

決勝の事を考える。

炎上の『炎』の個性は厄介だった。

炎は、攻撃であり防御だ。

相手の行動を制限できるのはやはり大きい。

『炎上の猛攻撃が続く！ おいおい、炎上は、ブレーキが壊れてんじやねえのか!？』

『短期決戦狙いか、あるいは……』

おい、言われてるぞ。

飛ばしすぎじゃないのか？

「あの監物とガチでやりあえるヤツと、正面切つて戦えるかよ！」

ああ、うん。

ものすごく納得した。

ちなみにその彼女にね。

『私に勝ったからには圧倒して瞬殺してこい』と脅されてるんだけど？

「よし！限界まで粘ってやるぜ！そして監物にボコられる！」

決勝まで来て、何を弱気な……。

「半分は本音だ。でも幻夢、お前つて中長距離の攻撃手段がないよな？今の俺の戦法に、何か、問題でも、あるのか？」

右へ。

左へ。

私はステージの上を走り回される。

まったくもって正論だった。

ああ、これは。

絶対に気絶はしないな、私。

骨折した左腕が、ものすごく響く。

動きも少し鈍い。

体重移動や切り返しの際に、わずかなタイムラグが生じる。

このまま逃げ回って、炎上の息が上がったところで接近戦か？

ははは。

そんな格好悪いことはできないな。

決勝のために万全の状態で臨むことも。

勝利のために持久戦を選択することも。

選べないんだ。

この試合において、私は個性を使うことができない。

個性使用時のデメリット。

過剰使用によるデメリット。

この二つは、似ているようで違う。

個性を使つてない時も、『私の思考や行動は縛られる』ってことは、それはもう、『私』じゃない何かじゃないか。

そこで悩めば、以前と同じだ。

プルスウルトラ。

一歩ずつだ。

一歩ずつしか進めない。

ヒーローは、格好いい存在だ。

だから私は、ヒーローの卵として、戦う。

格好よくしか行動できないんじゃないじゃない。

格好よく行動しなきゃダメなんだ。

みんなが見ている。

ヒーローに憧れる子供たちが見ている。

ヒーローを信じる人達が見ている。

誰かに認められない存在は、ヒーローじゃない。

個性の力ではなく。

自分の意志で自分を。

変えられるんじゃない。

変わるんだ。

これは、そのための。

私の。

宣言だ！

『どうした幻夢！ 足を止めて……おいおい正気か!? 真っ向勝負かよ！ 熱い男の選

択だ!!』

『著しく合理性に欠ける選択だな……』

いつものまにか、眠っていたらしい。

もう、夕方か。

昼飯を食べそこねたな。

携帯が鳴る。

予感があった。

『……よお、幻夢』

やあ、久しぶり。

『悪かったな……なかなか連絡を返せなくて』

……いや。

状況は、薄々想像できるつもりだ。

『はは……まあ、キツかったわ』

そう言って、彼が笑った。

彼の出身は、随分な田舎らしい。

雄英のヒーロー科に合格したからと。

雄英に入学するからと。

村人が総出で見送ってくれるような。

そんな場所らしい。

だからこそ。

自信も、プライドも、関係なく。

故郷で、顔を上げることさえできなかつたと。

彼は、小さな声で語った。

校長先生の家庭訪問。

校長先生は、私の事についても話したそうだと。

『……頭の中が、グチャグチャになった。感謝と、怒りと、嫉妬でな』

ああ。

それもわかる。

私のエゴだ。

殴られても文句は言わないさ。

ただし、殴り返しはするけどな。

『じゃあ、殴り返されないように、投げ落とすか』

やめてくれ、死んでしまう。

笑った。

笑えた。

『そういや、体育祭、見たぜ』

ああ、ありがとう。

『いや、バカだろ、お前。お前は、前線で真つ向勝負するタイプじゃなく、視野を広く、引つ掻き回すタイプじゃねえか。もしくは、仲間のサポートに回る。準決勝の、あのイカレ女はともかく、決勝のあれはないぜ』

いやあ、テンション上がっちゃってな……っつい。

『勝ちをしたけど、自分で歩けねえって……ダメだろ』

私もそう思う。

次はもつと格好よく決めるさ。

とりとめのない話が続く。

楽しい。

でも。

私が聞きたいのは。

別の。

一言なんだ。

『……ありがとうよ』

……そうか。

『今から、勝手な事を言う』

なんだ。

『お前は、止まるんじゃねえぞ』

全身の。

力が抜けるような気がした。

『歩き続けてくれ、前に向かって』

やめてくれ。

私は。

お前の。

ヒーローのそんな言葉を聞いたかったんじゃなくて……。

『俺は、そのあとを追う』

ッ!!

『さすがに、雄英に入りなおす気はしねえ。でもまあ、お前の言うとおり、雄英だけが、ヒーローになる道でもねえよな。雄英で、お前が歩き続けている。俺は、別の場所で、その背中を追うからよ』

頷くしかできなかった。

電話なのに。

見えるはずがないのに。

口を開けば。

泣き出してしまいそうで。

届いたんだよな。

私の言葉は。

私の手は。

彼が語る言葉を、私は涙を流しながらただ聞いていた。

『馬鹿だったけど、格好良かったぜ、幻夢』

その言葉を残して。

彼との通話は終わった。

ああ、随分と長く話していたのか。

外はもう暗い。

夕食の……

携帯が、鳴った。

『いつまで話してるのよ。まったく、男同士の長電話なんて笑い話にもならないわ』

あ、え？

なんで？

『ずっと続く通話中にピンと来て、あいつにもかけたら……やっぱり通話中じゃない。そりゃわかるわよ』

あ、ああ……なるほど。

『覚悟しなさい。あいつの倍は話すから』

私、夕食がまだなんだが。

そんな軽口が出るくらい、彼女の口調は明るかった。

『終わってからにして。私、家族以外の誰かと話すの、本当に久しぶりなんだから……止まらないわ』

……うん、彼女もまた、キツイ日々を送っていたようだ。

彼女の話題は多岐にわたった。

彼女が話し、私が聞く。

相づちマシーンの完成だ。

気が付くと、同じ話が始まったりする。

でも、同じ返事をするとう怒るんだ。

お腹、空いたなあ。

『そういえば幻夢。あの決勝、なんで個性を使わなかったの？』

使えなかったんだよ。

『ああ、そういうこと……使えたら、もつと楽に勝てたでしょうに』

そうかもな。

言えないなあ。

あそこで『個性』を使うのは格好悪いだなんて。

お祭りだから許される選択だとしても。

でも、嘘を言ってるわけじゃない。

使えなかったんだ。

『……ねえ』

どうかした？

『昨日の体育祭のアレ……あれは全部、あいつと私に向けたメッセージだったと思って

いいの？』

うん……そうだ。

最初に思ったのはその通りだよ。

でも、ほかのみんなにも。

そして、自分自身に対して……。

まあ、言いたいことを言っただけだった気もする。

『……ヒーローは特別な存在ではないと私は考える。大ききの違いはあっても、みんなの心の中にヒーローの卵が眠ってる。私も、貴女も、心の中から取り出したばかりの、ヒーローの卵なんだ』

ちよっ！

やめて。

私の心が死んじやうから。

私の抗議も何のその。

どこかからうように、彼女が続ける。

『失敗しても当然だ。迷ってもおかしくない。しゃがみこむことだってあるさ。でも、そこで起き上がらないと、ダメなんだ。歩き出さないと、死んでしまうんだ！』

いやほんと。

やめてください。

『……ヒーローの卵が、死にかけてたわ』

ぼつりと。

彼女がそうつぶやいた。

……間に合ったかな？

『ええ、ギリギリね、たぶん』

そうか、ありがとう。

『ええ、こちらこそ。ありがとう……マイヒーロー』

え？

『なんでもないっ……って、そうよ！あの応援合戦はなんなの!? 私はもつと美人のはず

よ!!』

怒るところ、そこなの!?

よくわからないが、彼女にさんざん怒られた。

『それで、あいつはどうするって?』

雄英に入りなおす気はないって。

よその学校のヒーロー科を受験するって言ってたなあ。

『そう……幻夢を先輩と呼ぶか、呼ばないか、悩ましいわね』

学校でヒーロー科の先輩とは、まだ会ったことがないな。

あんまり関係ないんじゃないかな。

『ふうん……それならあまり意味はないわね』

ん？

『ただの独り言……まあ、鈍った身体を鍛え直して……どこを受けるかはともかく、ヒーロー科を受験することだけは確かね』

そうか。

うん、良かった。

良かった。

本当に……。

『ちよつと、泣いてるの？』

うん。

『……否定してよ』

ああ。

『……心配させて、ごめんね』

いいんだ。

君がまた、歩き出せたなら……それだけで。

ありがとう。

本当にありがとう。

また私を救ってくれて……ありがとう。

起立。

礼。

着席。

「……」

相澤先生はしばらく私の顔を見つめ、言った。

「何か、いいことでもあったのか？」

ええ、ありました。

私は、ふたりの名を挙げ、語った。

ふたりがまた、ヒーローを指して歩き出すことを。

別に、相澤先生に対する意趣返しとかそんなじゃない。

この報告を聞いて、顔や言葉には出さなくとも、先生は喜んでくれるはずだと私は思ってる。

「……そうか」

少しだけ視線を背け、相澤先生はただそう答えてくれた。

ほかのクラスメイトのことを忘れたわけじゃない。

ほかのクラスメイトはどうだっていいって思ってるわけじゃない。

ただ。

0じゃなかったことが嬉しい。

0と1は、数字の上ではたった1の違いでしかない。でも、0と違って1には、希望がある、未来がある。

あのふたりが、ヒーローを目指して、誰も救わないなんてことがあるはずがない。私は、そう思ってる。

私の言葉が、行動が、あのふたりを救ったなら。

あのふたりが、この先多くの誰かを救うなら。

それは、どれだけの未来を救うだろう。

0じゃなかった。

ただ、それだけで。

私は、これからも前に向かって歩き続けられる。

この、ヒーローの卵としての道を、歩いていける。

「なあ、幻夢」

はい。

「お前のいう『前』が、お前の歩く方向が、認められなくなったときは、退学処分にする。それは変わらない」

とりあえず、見込みはある、と？

「……今のところはな」

高評価だ。

「ただ……今のお前は、どこか危うい何かを感じる」

危うい……ですか？

「誰かの為に、平気で自分の命を投げ出すような……うまく言えんが、以前の方が安定していた感じがする」

私には、よくわかりません。

そう答えるしかない。

この人は、よく見ている。

「まあいい。1年A組の最後の1人……担任として、処分させてくれるなよ？」
はい！

雄英高校、1年A組。

通称、ぼっち組。

ヒーローの卵が、今日も歩き続けている……。

そういえば相澤先生。

「なんだ？」

2年に進級したら、クラス替えというか、編成があるんですよね？

いや、先生。

なに、窓の外に視線を向けてるんですか？

「……ヒーロー科は2年になると」

いやだから、この教室に生徒は私しかいないんですから、私を見て話してください。

「研修や校外実習が増えるわけだが……」

質問に答えてくださいってば。

「結論から言おうと、その、なんだ……ない」

……さ、3年になれば。

「ない。1年からずっとそのまま」

マジで？

「まあ、その、なんだ……2年や3年は、学校生活がほとんどないから。そんな事を考えるのは非合理的だね、うん」

そっか。

続けちゃうのか。

どこまでも続けちゃうのか。

このぼっち組。

あれ？

昨日あれだけ泣いたのに。

また泣きたくなってきたぞ。

ああ、忘れてた。

私には、あの日友情が芽生えた木偶人形くんがいたじゃないか。

彼とともに学ぼう。

「うん、ちよつと落ち着こうか、幻夢」

どうやら私のぼっち学級は、卒業するか、退学になるまで続くようである。

NEXT：続いていく未来。

季節は流れて……。

雄英が、新たな新入生を迎える日。

ひとりの少年が、決意を胸に。

しかし、それ以上の不安と緊張、その他もろもろを抱えて……トイレに駆け込もうとしました。

「……うおっ!?!」

「すみません！驚かせてしまって、ごめんなさい！」

「ああいや……驚いたのは、そうじゃなくて……」

どこか戸惑ったような反応の彼の顔に、少年は見覚えがあった。

鍛錬に勤しんだ1年だったが、もはやライフワークとも言えるヒーロー研究や分析はもちろん、雄英の体育祭もテレビで観戦したからだ。

「幻夢さん……ですよね？」

「え？」

「去年の雄英体育祭をテレビで見ました。そうだ、聞きたいことがあつたんです。あの個性についてなんですが、あの個性の……」

「よし、落ち着こうか、みど……少年」

少年の語りをストップさせた彼は、ほんの少しだけ遠い目をした。

「見たところ、ヒーロー科の新入生かな？」

「はい、緑谷です……ヒーロー科の新入生に、見えますか？」

「え……ああ、もちろんだよ。何よりも目が違う、雰囲気が違う、オーラのようなものがある……これはヒーローとして重要な要素だと私は考える。いいかい、ヒーローつてのは……」

「あ、は、はい……この人、語りだすと本当に止まらないんだ……」

少年のつぶやきに対して、ツツコミ役はいない。

「ふむ、見たところ緊張が半分、不安が半分、そして……小さいが、硬く練りこまれた決意といった感じかな？」

「そ、そんな感じですけど……わかるんですか？」

緑谷少年の言葉に、彼、幻夢は苦笑を浮かべた。

「1年前の私と同じさ……私だけじゃない、みんなそうさ。勇気と希望を武器にして、不

安や恐れを飲み込んでいく……と、すまない。ヒーローの卵がわかったような口をきいてしまったな」

「い、いえ、ありがとうございます！」

幻夢は、そんな緑谷少年をしばらく見つめた。

「ふむ、せっかくの出会いだ……私から君に、入学祝いを贈ろう」

「え？」

君が目標とするヒーローは誰だい？

君はどんなヒーローになりたい？

守りたい誰かはいるか？

大事な笑顔を覚えているかい？

泣かせたくない人はいるか？

……。

……。

夢を、希望を、未来を、ほんの少しだけ、見せてあげるよ。

さあ、目を閉じて。

緑谷少年は、素直に従った。

そのまぶたに。

映し出されるもの。

「あ、あの、今僕が見たのって!？」

「はは、よく『未来のビジョンが見えない』などと言うだろう？なに、今のはただ単に私の個性を使った、幻想さ」

幻夢が語る。

「夢と希望の道には、困難や挫折がつきものさ………実力が必要だ、運が必要だ、そして仲間が必要だ。前に向かって歩き続けるためには、立ち上がるためには、そんな、何かが必要なんだと私は思う」

幻夢が、笑う。

「ほんの少しだけ……私の見せた幻想が、君の力になれたなら嬉しいな」

「あ、ありがとうございます」

「さて、緊張がほぐれたなら、どうする？君が向かうのは、トイレか？それとも……？」

緑谷少年は、もう一度頭を下げ……自分が向かうべき、1年A組の教室へと向かった。
「歩き続けろよ、ヒーロー、の卵！」

「はい！」

幻夢が見せたもの。

家族が。

友人が。

そして、顔もわからなかった……仲間たちと。

笑い合っていた……そんな光景。

それが、緑谷少年の……力になるかどうかは、まだわからない。

未来は、いつだって未確定の中にある。

それでも、明日に向かって……続いていくのは間違いない。

おまけの小ネタ集。

おまけ1：峰田くんとエロバカ。

いつもの早朝ランニング中、休憩に立ち寄った公園で、私は、運命と出会った。
「ああああああああああ!!」

いきなりの奇声に、そちらを向く。

ああああああああ!!

あつぶね。

もう少して、名前を叫ぶところだったよ。

初対面。

この世界では初対面だから、色々とまずいよね。

でも、せめて、心の中で叫ばしてくれ。

峰田くん!

峰田実くんじゃないか!

「ああああああああ!!」

私のズボンを掴んでがくがく揺さぶるこのリアクション。これだ、まさに峰田くんだ！

わけがわからないよって？

私の個性を覚えているか？

世間一般的に、私の個性は幻覚というか、幻影使いだ。

ここに、エロバカ峰田くんをセットしよう。

美女に囲まれたハーレム気分を味わわせてください、だ。

わかるんだ。

わかってしまうんだ。

男には、それがわかってしまうんだ。

私に任せろ峰田くん。

まずは、セオリー通り金髪美女2人で囲まれてみようか。

「ああああああああああ!!」

峰田くんが私を見る。

子供のような、キラキラした瞳で。

彼の瞳が語っている。

『いいの?』と。

私はただ、微笑むだけで良かった。

「え、ちよつ、嘘、これ、触れ……ああああああああ!!」

峰田くんは、金髪美女をもみくちやにしつつ、金髪美女にもみくちやにされていた。

まあ、服は着たままだし。

峰田くんは、外見は子供のそれだから、何も問題はない。

うん、ちよつとしたスキンシップだ。

それより見てくれ。

あの峰田くんの幸せそうな顔を。

ヒーローの卵として、私は何も間違っていない。

まあ、残念ながら。

個性でハーレム気分とか、私自身では楽しめないことだから。

いや、それを格好悪いと思っちゃうから、できない。

だから、私の分まで楽しんでくれ。

おまけ2：峰田くんとエロバカ2

「師匠ーっ!」

峰田くんは、師匠と呼ばれるようになった。

別に、エロの師匠ってわけじゃないんだが。

しかし、峰田くんはやはり優秀だ。

エロの執念というか、女にもてるためというか、成績は地元じゃぶつちぎり状態らしい。

昔は不思議に思っていたが、実技試験のあれって、『敵を行動不能にすればいい』わけだから、例の個性で敵の動きを封じればそれでポイントが稼げると。

いや、ちよつと触らせてもらったよ、あのボールみたいなもの。

いや、マジでくつつくの。

でも、ゴムみたいな感触で、なんか心が安らぐ感じ。

しばらくニギニギしてたんだけど……閃いてしまった。

これ。

エログッズに使えね？

峰田くんにはくつつかなくて、ほかにはくつつく。

そして峰田くんに対しては弾力があって……はずむ。

それはつまり……。

峰田くんは耳打ちしてみた。

「ああああああああ!!」

「エロ師匠っっ!」

うん。

峰田くんに、エロ師匠って呼ばれるようになった。
ヒーローの卵として、何か間違った気がする。

おまけ3：羞恥地獄。

「コードネーム、ヒーロー名の考案だ」

1年A組の教室に、相澤先生、ミッドナイト先生、そして私。

うん、先生の方が多い。

さすがに私1人で『胸膨らむやつきたああ!』などと騒いでも寒々しいし……流そう。
相澤先生、ミッドナイト先生は何故ここに?」

「幻夢君のコードネームおよび、ヒーロー名をチェックするため」

はあ。

まあ、ここであつかつな名をつけると一生後悔するってやつですよね？

銀行でペンネームを呼ばれるようなもんだよな。

コードネームはともかく、トリックスターってのは決めてます。

「幻夢君、あなた、体育祭のせいでやばいことになってるからね」

え？

「こんな動画が、わんさかと」

相澤先生、ちよつとトイレに行つてきていいですか？75日ぐらい。

「名前を決めてからにしろ」

「いや、名前つて世間の認知と一致させたほうがいいのよ……普通は、徐々に名前が知ら

れていくパターンが多いんだけど、幻夢君の場合、先に名前というか、イメージが定着しちゃってるのよね、既に」

楽しそうですね、ミッドナイト先生。

薄々理解してますけど、どんなイメージになってます？

「青春くん。熱血くん。演説ヒーロー。熱苦しい。マントフェチ……」

トリックスターです！

私はトリックスターですから！

「敵に向かって、熱い言葉で改心させていく、改心ヒーロー……たぶん、そんな感じよ」
いやいやいや。

改心ヒーロー、トリックスター！

イメージが正面衝突してるじゃないですか！

ああ、あの頃はまだ、平和だったなあ。

いや、秋から始まったアニメがね、ヒーローを目指す物語でさ。
この世界では定番といえば定番なんだけど。

体育祭での私のセリフがもりもり採用された。

街角で。

公園で。

子供たちが、叫ぶんだ。

歩き出さないと死んでしまうんだ！

ヒーローの卵が！

死ぬんだよ！

うん、ヒーローの卵が、死にそうだ……。

私のコードネーム？

秘密だ。

おまけ4：見敵さんはやはり癒し枠。

「あ、幻夢さん」

ああ、見敵さん、久しぶり。

私の彼女の呼び方は、さん付けに落ち着いた。

ぼっち組とはいえ、私の学校生活がぼっちってわけじゃない。

体育祭を通じて知り合った生徒が、たくさんいる。

私を見かければ、こんなふうに声をかけてくれる。

……ぼっち組に所属する私への、同情じゃないはずだ。

見敵さんにぶちのめされた後、見敵さんは精神的に少しあれだったが……立ち直った。

私と見敵さんの試合を、何度も何度も繰り返して見続けたそう。

うん？

よくわからないが、立ち直るきつかけになつたら何よりだ。

ただ、あの試合で死を予感したせいなのか。彼女の個性は、成長したそうだ。

「危険がわかるのはいいんですが、危険がわかりすぎるのは不便ですよ」
彼女はそう言う。

うん、なんとなくだが、わかる気がする。

下手をすると、家から一步も出られなくなる……そういうことだろう。

「だから最近、ちよつとだけ体を鍛えています」
可愛くガッツポーズ。

うん、外見そのものが目をひくってわけじゃないけど、こういう部分が、癒し粹とい
うか、小動物的可愛さというか、うん、和むね。

たぶん、彼女の周囲にもファンがいるだろう。

「あ、時間だ。じゃあ、幻夢さん。また」
手を振って、三つ編みの髪を揺らして彼女が去っていく。

うん、今日も頑張ろう。

そんな気にさせてくれる彼女だった。

おまけ5：創成は今日も美人。

わかっていただけ。

創成は学校生活においてやっぱりそっちの制服だった。

「人は、似合う服を着るべきだよ」

あ、はい。

似合ってます。

創成が、美少女キャラよろしく、その場でぐるりと回ってみせる。

今日も可憐だ、ポニーテール。

広がるスカートは、魔性の魅力。

言うまでもなく、創成はサポート科の生徒だ。

原作における発目さんのイメージが大きかったけど、サポートにもいろいろ種類がある。

ヒーローの健康維持方面。

精神方面。

戦闘方面。

それぞれの分野で、研究と実践に別れていて結構細かい。

言ってみれば、経営科の見敵さんだって、事務所の経営で言うならサポート役だ。むろん、ヒーロー事務所所に所属するとは限らないけれど。

ああ、話がそれた。

創成は、私のヒーローコスチュームや、アイテム作成に関して、コンビを組んでいるような感じだ。

覚えているだろう？

私の、中長距離の攻撃手段の少なさを。

つまりは、その部分をアイテムで補助できないかってことさ。

開発は、本来地道な作業の積み重ね。

発目さんのようにはいかない。

彼女もまた、強キャラってことだよ、きつと。

まあ、創成との付き合いは長くなる気がするなあ。

おまけ6：響はわりと苦勞人。

響がA組にやってきた。

そしてため息をつく。

B組の居心地というか、雰囲気が悪いらしい。

ああ、うん。

避難所か、おい。

雄英のヒーロー科に入学できるような生徒たちだ。

優秀なのは言うまでもない。

今までは、自分ではなく周囲がそれに合わせていた生徒も多いんだろう。

一言で言うと、協調性のある生徒が少ない。

まあ、かつてのA組の仲間にも、そんな片鱗はうかがえたからな。

いや、でもな。

協調性のある響が、ここに逃げてきたらどうなるの？

響が、ポツリとつぶやいた。

「もうやだ、あいつら……」

ぼっち組にはない苦しみが、B組には存在するようだ。

人生は甘くないということか。

「俺って、耳がいいだろ？聞こえてないと思ってるかもしれないが、聞こえてるんだよ。

あいつらの本音がさ、漏れてるんだよ……」

ああ、その、なんだ……どんまい。
そっか、原作の彼は……こんな感じか。

響を慰めていると、また誰かやってきた……って、おい！

B組の委員長の平と、決勝で戦った炎上の2人。

B組の良心と、『B組ではまともな方』の2人。

いや、窓際の席に座って、ため息つくなよ。

なんか言えよ。

B組は今、どうなってるんだ、怖ーよ。

おまけ7：来る、きつと来る……監物さんが。

「さあ、やりましょう」

美少女とふたりつきりで、こんな言葉を囁かれる。

ははは。

あの峰田くんでも、勘違いしないよ。

監物さんが笑ってる。

まさに泣く子も黙らせる微笑み。

……笑顔にはできないけど、涙を止めることはできる微笑み。

彼女が言うところの、『私に対する教育で、矯正』なんだそうだと。

まあ、確かに彼女と殴りあうのはものすごく勉強にはなるけどさ。

なんで彼女は、もう治ったはずの右腕を撫でながら私を見るんだろう？

ああ、そうそう。

監物さんは、ひとつ壁を破ったよ。

両手を使った、竜巻のような連撃。

これを必死に耐え忍ぶ私……という状態からの、蹴り。

彼女の連撃を支えるのは、その下半身だ。

だから、連撃に組み込むことはできないけど、ここぞの場面で全然違う角度と方向か

ら、ズドン、だ。

なあ、人間って、空を飛べるんだぜ。

「どうですか。痛みというものはありがたいものでしょう。次はこうはなるまいと決心を固めさせてくれるはずですよ。さあ、いつまで寝ているつもりですか。早く立ちなさい。ヒーローの卵は、立ち上がらなくてはダメなのでしょう」

ああ、それを言われると弱いなあ……。

なんとか立ち上がるとさあ、彼女、笑うんだよ。

さつきとは、ほんの少しだけ違う……ちよつとだけ柔らかい感じで。

気のせいかなあ。

気のせいじゃないと思うんだけどなあ。

どうやら私は、順調に教育されているのかもしれない。

おまけ8：相澤先生。

1年A組の教室。

誰もいない教室。

相澤先生は、ポツリとつぶやいた。

「そういえば、幻夢は欠席するって連絡があつたな」

口にするまでもない言葉。

非合理的なそれは、照れ隠しだったのかもしれない。

出欠を書き込み、相澤は教室を後にするのだった。

おまけ9：縛くんと、訓練。

強い。

巧い。

接近戦から中距離戦まで、オールマイティにこなせる。

防御も攻撃も、どちらもこなせる。

そしてなによりも捕縛スキル。

問答無用の捕縛スキル。

色々ともザイクが必要な捕縛スキル。

ヒーローとして様々なタイプがあるのを承知で言う。

私たちの学年で、最もヒーローとして総合レベルが高いのは、この男だ。

……この男なんだ。

「新しく買ったばかりのロープをすぐに使うなんてありえないよ。まずは、手や体に馴染むまでじつくりと時間をかけて、種類によってはケバを炎で炙ってちゃんと処理しな

いと、肌を必要以上に刺激するからね。ロウや油を塗りこむ方法もあるけど、あまり好きじゃないなあ」

ああ、うん。

その話、続くんだけ？

というか、ひとつだけ聞いていいか？

どういう状況で、その個性は発覚したんだ？

「最初は縄跳びの縄がね……」

おけ。

もういいです。

訓練の続きをしようか。

縛の標準装備は、ロープ4本。

これは、上半身のみの縛めに使う分で、フル装備だとさらに本数が増えるそうだ。

一般的なイメージとは裏腹に、緊縛は関節を極めるものであって、締め付けるものではなくて、使うときはふたつ折りにして肌に触れる面積を広げること、その負担を……。

縛との訓練は勉強になる。

勉強になるんだけど、余計な知識が増えていく……。

おまけ10：ヒロインは誰だ。

「私に決まってるじゃない。彼は、私のために……」

「名前もない誰かさんは身の程を知るべきですね」

「あら？ 戦闘キチが、何か言ってるわ……聞こえない」

「ほう……愚かな存在に、痛みを教えてやるべきですか」

見敵さんはいち早く逃げ出した。

創成は、様子をうかがっている。

「……待ちなさい、あなた男でしょ？」

「カワイイは正義」

「ほう、よりによって私の前で正義を語りますか……」